甘くない偽物の恋

鼻眼鏡26号

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少々特殊な中学時代を送った大谷優。

彼の人生は高校から普通とは言えない人生をすごすこととなる。

注意

一部流血表現や死亡表現などを含みます。

そして、原作通りとも言えない独自世界にもなります故に苦手な方はブラウザバックをしてください。

ニセコイは読んではいますが全巻ではありません故に事細かな詳細な情報が間違っ

たりします。

それでもよかったら読んで言ってください。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 27
3話 …… 39
4話 …… 49
5話 …… 59
6話 …… 73
7話 …… 88
8話 …… 103
9話 …… 113
10話 …… 122
11話 …… 134
12話 …… 144
13話 …… 154
14話 …… 160
15話 …… 176
16話 …… 187
17話 …… 193
18話 …… 203
19話 …… 220
20話 …… 231
21話 …… 237
22話 …… 245

1話

料亭　おおたに

俺の名前は大谷　優（オオタニ　ユウ）この実家である料亭おおたにの一人息子でもちろん目指すのは料理人である。

料理は楽しく幼い頃から親に料理を教わりそれなりの腕前にはなっているはずだ。

そんなことより現在の季節は春まともな中学時代を送れなかった俺にしてみれば楽しみでした方がないのだ。

春

それは始まりの季節。……なんて恥ずかしいセリフを言えるほど今の俺はとても浮かれて居た。

高校こそ友達を作り可愛い彼女を作ってリア充ライフを送ってやる。

と先ほどまで息巻いていたけれど校庭にリムジンが止まりそこから現れるヤクザとその中に1人で同じ制服を着た生徒であろう人。

そんな光景を朝から見てしまいただでさえ不安な高校生活をより不安にさせる存在がそこにはいた。

絶対あれはこの学校を牛耳る存在だと思い俺はその日から誓った彼には近寄らないようにしようと。

1年C組　教室

誓いを立てていた俺は自分の不運さに嫌気をさしていた。

なんで同じクラスなんだヨォォォォ!!

自分のクラスの教室は名前順で机が並ばれていてはじめは一番後ろの席でよかったなと思っていたけれど自分の列の一番前にその人物は座った。

先ほどの自己紹介で知ったが彼の名は一条　楽と言って彼自身からはヤクザのようなオーラを感じなかったが能ある鷹は爪を隠すという言葉を思い出して未だ警戒を緩めなかった。

意外にも中学時代で世界を股にかける料理修行（強制）でジャングル生活をした時の

野生動物に対する野生の勘なども役に立っている。
ちなみに料理修行ってのは親が勝手に俺を送り出し中学時代3年間の内単位に支障がない程度で世界中を回されたのは今となってはいい思い出である。
まぁそんなこんなで頑張ろうと思い日にちを過ごす。

一ヶ月後

こうして一ヶ月も過ごすと周りも友達などを作り各々が学園生活を送っている。
俺も家庭科の調理実習で料理の腕前を披露すれば友達を作ることが出来たのである。
一番の驚きはそこに一条楽も含まれていることである。
一条楽はどうも料理が得意らしく俺の料理の技術についてよく質問をして来たりなどとよく話すようになりそこから彼の家庭事情やら色々と聞いて苦労してるのだなと自分は感じた。

そんな日々を送ったある日

それはなんてことない朝の通学路である。
今日は時間が結構ギリギリで走りながら向かういつもの通学路

野生のチーターを追いかけるために鍛えた走力が役立っているところ学校に到着すると後ろから黒リムジンがやって来た。
いつ見てもすごい送迎だなと思いながら中から出てくる人物を見た。

「「行ってらっしゃいやせ!!!」」

この小説の記念すべき第一声がヤクザの掛け声なんてと思いながらも送り出された生徒が俺に気づき向かって来た。

「朝っぱらから大変だな…楽」

笑いをこらえながら言う俺に

「笑い事じゃあねぇよ…優……ったく朝から変なものを見る目で見られるから嫌だった

のに。」

「嫌だとか言っても乗ってくるところを見るとそうは見えないがな」

「はぁー…無下にするわけにはいかないからな。」

そんな朝のなんてことないその日俺の人生を大きく左右する物語が始まろうとしていた。

その始まりは学校の2メートル以上ある壁を超えて現れたのである。

「へ?·まじで?·」

「優…どうしッ……ぶへッ!·」

その存在は壁を越えると着地地点にいた楽の顔面に足をつけて着地した。

そこにはすらっとした体型で長く綺麗な金髪でトレードマークのような大きなリボンをしていた美少女であった。

「ごめん…遅刻しそうだったから…ゴメンねー！」

それだけ言うとそのまま学校に走って行った。

「あーその…なんだ…ドンマイ。」

「な…なんて…女だ」

そんなこんなで俺たちは自分の教室へと向かう。

1年C組

「おいーす…おはよう。」

俺は元気よく教室の扉を開けてその後ろを楽も傷だらけで不満げな顔で入る。

「おはよー…優に楽も…ってうわっ!?」

「一条君!?どうしたのそのケガ！」

最初に言葉を発したのは舞子集で楽の幼馴染であり親友だ。
俺としてはなかなか読めない奴という印象だ。
そして次に声を発したのは小野寺小咲楽とは中学からの同級生であり誰にでも心優しくそれでいてとても可愛い。ちなみに楽は小野寺に恋をしている。言ってはいないが俺も一目惚れして小野寺に恋をしているのである。

「鼻血出てるよ…絆創膏貼るから」

小野寺が自分のバックから絆創膏を取り出し楽の鼻に貼る。
ちなみに楽は真っ赤な顔をして震えていて俺はそれを羨ましそうに見ていた。

「なぁなぁ優…なんで楽はあんな怪我したんだ?」

「ああーそれがな「そうだよ聞いてくれよ!」…話遮んなよ。」

説明しようとしていた俺に被せて声を上げる楽は相当ご立腹のようだった。

「はぁ?女通り魔にやられた?…バカ言えようちの学校の塀は2メートル以上あんだろ。それを飛び越えて膝蹴りってどんな女の子だよ。」

「本当なんだって!なぁ!優!」

話を信じてもらえず一緒に見ていた俺から証言を取ろうとして考える楽は俺に聞く。

「俺も見てたよ。あの体の身のこなし方是非ともうちの部活に欲しいと思ってる。」

「まじか。優が言うならマジらしいな。」

「おい集…それだと俺の言葉には信用ないって聞こえるぞ。」

「はっはっはー……そんな事より今日来る転校生は女の子だぜ。しかも噂では美少女だとか。」

「話晒しやがった。」

楽と集が談笑していると小野寺が

「あれ？大谷君って部活入ってたの？」

「あれ？知らなかったっけ？優は料理研究部に入ってんだよ。」

小野寺の疑問に急に集が答え余計小野寺を困惑させた。

「え？料理研究部なのに体の身のこなし方？」

「優の料理研究部は材料を買うんじゃなくて現地調達だからな。」

「おう…この前イノシシを使った鍋食ったぞ。イノシシ素手で捕まえんの大変だったわ」

「「え？」」

俺の発言に事情を少し知っていた集すら揃って3人が驚いていた。

そんなこんなでホームルームが始まり担任のキョーコ先生が進行させて全員が待っていた転校生紹介となって

「よーし今日は転校生を紹介するぞー…入って桐崎さん」

「はい」

先生の呼び声に反応して返事をするその女の子が入って来ると生徒全体がおおーと歓声をあげる。

そこに居たのは

「初めまして！アメリカから転校してきた桐崎千棘です。母が日本人で父がアメリカ人のハーフですが日本語はこの通りバッチリなので皆さん気さくに接してくださいね！」

自己紹介を終えると同時に見せる笑顔でクラス全体が歓声をあげた。

「それじゃ取り敢えず席に座ってーー」

「「あーーー!!」」

楽と桐崎は互いを確認して急に大声をあげた。

ちなみに桐崎は俺にも気づいたようであった。

「あ…あなたさっきの「さっきの暴力女！」…へ？」

楽の言葉にクラスメイトがざわつく

「ちょ…！何よ暴力女って!!」

「さっき校庭で俺に飛び膝蹴りを食らわせただろ！」

「ちゃんと謝ったじゃない！」

２人は大声で口喧嘩を初め周りはポカーンとして居た。
ちなみに俺は部活勧誘の言葉を考えていた。
そんな中楽はおおよそ女の子に言ってはいけない言葉を放った

「この…猿女!!」

ピシッ

まさに人がキレる時の音が聞こえた気がした。

「誰が猿女よ!!」

そのまま桐崎は楽に顔面に拳を打ち付け楽を吹き飛ばした。
ポカーンとした雰囲気の中俺は気絶している楽の元に寄り

「…今のは楽が悪いよ」

クラス全体がうんうんと頷いていた。

授業前の休み時間

「俺は大谷優…桐崎さんよろしくな。」

「へ?…あ…うん…よろしく。ってそれよりどうしてくれんのよ!恥書いちゃったじゃない!」

先ほどのことがあってかクラスメイトは誰も近寄らなくて楽が桐崎に廊下に連れ出

されて行くのを見て俺もついて行きついでに自己紹介もした。
そして現在絶賛楽に詰め寄って怒りをぶちまけていた。

「普通逆だろ！俺は膝蹴りに殴られてんだぞ！」

「あんたのせいでこっちも迷惑してんのよ！華々しく高校デビューを飾るところだったのに！」

「しるか！手を出したのはそっちだろ！」

「まぁまぁ…2人とも一旦落ち着けって」

俺の制止も聞かず喧嘩を続ける。
そんなところに

「おやおや～何々？あんたら3人知り合い？それなら丁度良かったわ」

キョーコ先生が言った言葉はこうなった。

楽　桐崎　優

と桐崎を挟むような席となった。

「「えええええーー！」」

「なんで俺がこいつの隣に。」

２人は驚き声を上げるが俺は何故２人は机を並べて席に着いてから急に驚いたのかを不思議に思った。机運んでる時静かだったのに。

「「断固抗議する!!」」

「申請は却下されました。」

「じゃあよろしくな一条と大谷～」

そう言ってキョーコ先生はそのまま戻って行った。

「まぁ取り敢えず3人仲良くやろうぜ。」

「「大谷君（優）はいいけどこいつとは嫌だ!!」」

「息ぴったりじゃん。」

俺は2人を見て喧嘩はしているがまあまあ仲良くなりそうだなと考えていた。

「あーー! 無い!! 俺のペンダントが無い!!」

考えにふけっていた俺の隣で楽が大声を上げた。

「あーそういえば桐崎さんが楽に膝蹴りをした時なんか飛んで行ったの見たな。」

「え!?じゃあ!あの塀のあたりか!おいお前も探すの手伝え!」

「はぁ?なんで私がそんなもの探すの手伝わなきゃなんないのよ。」

「お前の膝蹴りでなくなったのは優の証言でわかってんだ…それだったらお前が探すのが筋ってもんだ。」

「なんですって!?……ハァ…で?どんなペンダントなのよそれ?」

「チェーンの先に錠がついたやつで。」

「え?」

楽が説明していると話を聞いていた小野寺が反応した。

「ん?どうした小野寺?」

「え？…あ…多分勘違いだと思う。」

「そっか」

「あの一条君私も探すの手伝おうか？」

小野寺の優しさは誰にでも平等で全く関係ないのにそれでも手伝おうとするそれがいいところだと俺は思う。

「いや…小野寺は手伝わなくて大丈夫だ探すのは俺とこいつだけだからな。」

「俺も部活ない日なら探すぜ。なんせ目撃証言があるから推測程度は出来るぜ。」

「悪りぃ助かるわ優」

「…分かったじゃあそれ探す代わりに今後私に学校の中で話しかけないって約束してく

れる？」

桐崎は探すのは了承したが楽に条件を出した。

「あ…大谷君は別だからね。」

「お…おうそうか。」

「だいたい私嫌いなのよ過ぎたことをぐちぐち言う男って。器の小さい男と友達なんて思われたくないしね。」

「おー分かったよやってやる望むところだ！」

と2人は互いに了承するとキョーコ先生が

「そうだひとつ言い忘れてたよ一条…桐崎に学校のことを色々教えてやって欲しいからさ桐崎と同じ飼育係にしたからよろしく。」

こうして2人は珍獣博物館である飼育係に任命され渋々了承していた。

こうして楽のペンダント探し始まった。

2日目

なんやかんやで2人は喧嘩をするものの話はしていた。

「ほれ…さっきの現国のノートだお前全然取りきれてなかっただろ。お前の事は嫌いだが困ってる奴は放って置けないからな。」

「……話しかけんなって言ったハズだけど?…余計なことしないでくれる?」

そうして桐崎は歩き去って楽は煮え切らない顔をしていた。

「ハァ…まぁ楽のやった事は間違ってねえよ。お前のそうゆう所はいいと思うぜ。」

俺は楽にフォローを入れるようにして不満を爆発させないようにした。

そんなこんなでペンダントは見つからず7日目

最近ギャングやヤクザが活発化しているこの頃

互いの仲の悪さからそろそろ来るであろうと感じていたその日が来てしまった。

「桐崎さん遅かったね。」

俺は言葉をかけてそちらを向くがその顔はストレスが末期の時の顔だとすぐに分かった。

「もーー我慢できない!!やってられるかこんな事!!」

「な…なんだよ急に」

「……」

俺は2人から一歩下がり見守る事にした。

どうなるかは大体想像はつくけれど。

「クラスメイトから変な噂されるわ……探し物も見つからないわ！やってられるか!!」

「…ふざけんな!!てめーの過失でもあんだろうが!!」

「ちょ……2人とも…「小野寺ストップだ」!?…大谷君?」

止めに入ろうとしていた小野寺を俺は止める。

「ここらであいつらに言いたい事言わせてやれ。じゃないとあいつらにストレスでおかしくなっちまう。」

「でも！」

それでも喰い下がらない小野寺だがそれよりも先に楽の限界だったようで。

「うるっせえな!!だったらもう探さなくていいからどっか行けよ!!」

その声と同時にポツポツと雨が降り出した。

「……分かった。」

桐崎は静かに歩き去って行った。
その後は雨が降り出したためそのまま解散となった。
誰1人として話はしなかった。

１０日目の放課後

俺は部活を早めに切り上げて校舎を歩いていると無くしたであろう塀の近くに人影を見つけた。

俺はその人物に会って話すために向かう。

「……探さないんじゃなかったの？」

「!?…お…大谷君か…びっくりした。」

「悪かったな。……で？見つかりそう？」

俺の言葉に桐崎はなぜか慌てだして。

「へ？…なな…何が？」

「いや…誤魔化さなくても分かるから。」

「だ…だよね～……ハァ…まじで見つかんない。」

「……ねぇ…見つかったらどうすんの？」

「そ…それは……どうしよう。…直接なんて無理だしな～投げればいっか。」

「…ん?……そしたらさそれに手紙でも括り付けて一応は謝っときなよ。」

そう言いながら俺は近くの木に登る。

「……分かってる…でもな～全然見つからない。」

桐崎はそう言って地面に寝転がる

「…そうでもないよっと。」

そうして俺は木のてっぺんから飛び降りて桐崎の前に着地した。

「うわっ!……ちょっと大丈夫なの!?てか何してたの!?」

「……どうやら見つからないのはカラスの所為だったみたいだな。…ホレ。」

そう言って桐崎に投げ渡したのは

「あ!…あいつのペンダント。…そりゃあんなてっぺんだったら見つからないわね。」

「じゃあ…後は頑張ってね。」

「うん……ありがとう大谷君。」

それから次の日に桐崎は楽に確かに投げ渡したしこの件は終わった。

ここから俺の人生は少しずつ確実に予想だにしない方向に向かって進んでいた。

今の俺には知る由もなかった。

第2話

休日の日曜日

休日は基本実家の店で手伝いをさせられていて遊びに行くなど滅多にない地獄の休日を過ごしていた。

料亭おおたには和洋中など様々な料理を作り豊富なメニューな店となっている。

「3番テーブル、カツ丼とミートソーススパゲッティ…シェフの気まぐれが一つずつ。」

「はいよ～…優！カツ丼よろしくねー」

「りょーかい。」

俺は注文通り刻んだ玉ねぎをフライパンに入れてかき混ぜた卵をよく焼いた玉ねぎの中に投入し蓋をし煮るその間にカツを切ってフライパンに投入。

よく焼けたらご飯の入った丼に乗せたら完成。

「カツ丼出来ました。」

出来上がったカツ丼をウェイターに渡しまた調理場に戻る。

時刻は昼を過ぎて峠は越えた。

「優～今日はなんか客少ないからこの後休みでいいよー」

「マジで！やった～!!」

母親からの終了の言葉を聞いて久しぶりの休日に心躍らせた。

それから俺は街へ出かけた。

少し前までギャングやヤクザが抗争していた街とは打って変わって急に大人しくなって普通の街として活気が戻っていた。

優はその街を歩き本屋で漫画を買ったりゲームショップに行って見るだけで楽しんだりと高校生らしい休日を過ごしているのではと思われる。
そんな優が街で見たことのある人影を見つけた。
そして絶賛トラブルに巻き込まれている最中であった。

「なぁなぁ君かわいいねー今ヒマ？俺たちとお茶しない～？」

「人を待ってるんで。」

優の視線の先３００メートル先にいた桐崎千棘を優のもとよりよかった視力が捉えていた。
優は人混みを割って歩き出すが船を出す為に歩くが人混みに流され前に進むのに手こずっている。
そんな事をしていたら

「ちょ！……離しなさいよ！触んな！」

「いいじゃんいいじゃん…てか力強っ」

ナンパ男が桐崎の腕を掴んでいて桐崎は必死に振り解こうと手を振っていた。

流石にまずいと思っている優は強引に進むが桐崎が手を出す方が先になりそうであった。

そこに突然現れた存在がいた。

「いやーすみませんねー!!こいつ俺の連れでしてねー!!」

一条楽、彼が勢いよく高いテンションで現れて勢いで誤魔化して抜け出そうとしていた。

しかし、そうは上手くはいかなかった。

「触んなよっ!…お前みたいな冴えない男には用はねぇよ。」

桐崎を掴んでいた手で楽の顔面を打ち付けた。

「がっ！…いってぇ！」

打ち付けられた顔面を抑えるが楽の鼻から鼻血が出ていた。

その状況を一部始終見ていた優は周りの人を御構い無しに退けて走り出し一気に詰め寄り楽に打ち付けた腕を掴んだ。

「!?…なんだてめぇ！…触ってんじゃねぇよ！」

急に現れた男に腕を掴まれ驚くナンパ男は腕を振り解こうとするがビクともしなかった。

「優!?」

「大谷君!?」

楽と桐崎は急に現れた知り合いに驚き声を上げるけれど優の耳には届いておらず優の目はじっと力強くナンパ男を見続けていた。

「俺の友達に手を出すんじゃねぇよ。」

その言葉と同時に優は握力を強め掴まれている腕からはミシミシと音が聞こえた。

「いててて！…お…お前らこいつをやれ！」

ナンパ男は後ろにいる仲間の３人に指示を出すが。

「む…無理だ…か…体が動かねぇ。」

仲間の３人は体をガタガタと震わせて一歩も動かなかった。

その原因は優であった。

彼は野生を触れて相手に遅れをとらない為の眼光と相手の恐怖本能に訴えるプレッシャーを海外の料理修行で学んでいた。

料理旅のはずなのに。

「いててて！わ…分かった！分かったから離してくれ!!」

ナンパ男は痛さに耐えかねて懇願してきた為優は腕を離すと

「さっさと失せろ。」

男にだけ聞こえるようにその本能に問いかけるように小さく呟いた。

それを聞いた男は仲間を連れて慌てて逃げ出した。

男たちが見えなくなったら優も先ほどのプレッシャーを解いて友達の方へと振り返る。

「大丈夫か？楽に桐崎さん…ってなんで2人とも地面に座ってんの？」

「こ…腰が抜けた。」

「マジかよ」

実は優のプレッシャーは周囲の人にも影響していて周りは逃げるなりこの2人同様に動かなかったりしていた。

「ってか…なんか周りに注目されてるな。…2人ともちょっと移動するから」

「へ？」

そう言って優は2人を両脇に抱えて走り出した。

公園

街から離れて住宅街の公園にやってきた3人はベンチに座っていた。

「鼻血止まったか？」

「あ…ああ…悪いなハンカチ借りて。」

「おう…洗って返せばいいさ。んでさ…事情とか聞いた方がいい？」

「!!」

楽と千棘は優の質問に体をビクつかせた。

「まさか君達2人が休日デートに洒落込んでるの見てしまったからね～気になって気になってしかなくてさー」

楽と千棘は本質がバレてなくて安心するがこの状況そのものが気不味くクラスメイトにどう対応するかを悩んだ。

本質とはギャング、ヤクザの抗争をさせない為に偽物の恋人を演じていることである事でその事をここで説明したくてもこのデートにはそれぞれのギャングとヤクザがどこで隠れて潜んでいるかわからない為言い出せずにいた。

「いやー俺たち付き合うことになってよーなぁハニー！」

「そ…そうなのよーねーダーリン！」

恥を覚悟で演じる事にした。

「え？…そうなの？」

だがその目撃者は優だけでは無かった。

「「え？」」

「あれ？小野寺…奇遇だなこんな所で。」

「あ…うん、こんにちは…ちょっと3人を見かけてね。」

小野寺の登場に顔が凄いことになっている楽と千棘はあたふたし始め小野寺が好きな楽は物凄く焦っていた。
気まずい空気の中話を切り出したのは。
「あー俺この後用事があってな…悪いがここらで俺は帰るよ。」
優は逃げるという選択をした。
正直耐えられなかったからである。
「お…おう…ありがとな助けてくれて。」
「ほ…本当にありがとね。」
「おう…小野寺もじゃあな。」
「うん…さようなら。」

楽と千棘は口には出さないが顔に行かないでくれと言っているのが見て取れるが優は気にしないようにそそくさと帰った。

そして、学校に到着すると楽と千棘が付き合っているという事実がバレていた。

3話

休日デートを目撃した日の次の日

俺はあの空気の中逃げ出したことにちょっとばかし罪悪感を感じながら歩く朝の通学路。

「ハァ…朝会ったら一応謝っとくかな。」

そんな重い足取りの中教室に着くとクラスメイトが盛り上がっていた。

「お！おはよう優なぁなぁ聞いたか聞いたか！」

「ど…どうした集朝からテンション高いなウザいくらいに。」

「はっはっは…聞いて驚け。」

「おおう…無視か。」

「あの楽が桐崎さんと休日デートしていたのを城ヶ崎と板野が目撃してな。」

「「見ましたー！」」

「お…おう」

知っているせいかいまいち高いテンションについていけない

「なんだよ優あんまり驚かないな。」

「お…おう…いや意外だったからよ。驚いて。」

「だよなー意外だよな!!」

テンションが高い集に合わせて見たものの心の中では楽や桐崎に悪いことしたなと思う。

「ん?あれ…あの人誰だろう?」

そんな考えをしていたら窓の外にある木に登ってこちらを見ている人を見つけた。

「あ…隠れた。」

俺の視線に気付きいち早く男は隠れた。

「誰だったんだろう。」

そうこうしているうちに楽と桐崎がやって来てクラスメイトに先生までもお祝いやらで騒がしくなっていた。

その日の放課後

お祝いムードは冷め切らないまま迎えた放課後。
俺は料理部の部室に向かっていると

「じゃあまた誘うね。」

「うん…ごめんね。」

廊下で話していた桐崎と女子生徒が別れるところであった。

「よお…桐崎さん。」

「あ…大谷君」

「誘い断っちゃってたけどよかったの？」

「あ～それなんだけどね。……私のことよくしてくれてる大人の人がいてね…その人す

ごい過保護でさそれでその」

「友達との接し方がわからないって所か？」

「そ…そんな所かな。」

桐崎は「ははは」と笑うがどこか悲しそうな目をしていた。

「それならさ…これからうちの料理部に来て見ないか？」

「えっと…え？今から？」

「そ…今から」

料理部　部室

学校の一階にある調理室その前にやって来た２人。

桐崎はどこか緊張していた。

「き…緊張して来た。」

「大丈夫だよ…ちょっとキャラの濃いのが三人いるだけだから。その内1人は女子だし。大丈夫だよ」

「キャラ濃いの!?余計心配なんだけど!」

「ウィッス!」ガラガラ

「ちょっと!?まだ心の準備が!」

桐崎の言葉をよそに俺は扉を開ける。

「配置につけ!」

「「はっ！」」

突然女子部員の声に2人の男子部員が女子部員を挟むように一列で並んだ。

「君のハートをじっくり温める煮込みの小木良太！」

「可憐にそして優雅に輪切りの中林優香！」

「大胆にかつ冷静に仕込みの大森巧！」

「「我ら料理部!!」」

（…とんでもないところに来てしまった。）

決めポーズを決めて完全ドヤ顔の残念な美男美女料理部員を見て桐崎はポカーンと呆然としていた。

「ふむ…やはり部活動勧誘としてはインパクトが足りないな。」

「え!?大谷君!?」

「「さすが部長!!目の付け所が違いますね!!」」

俺の指摘に桐崎は声を上げて驚き3人は歓喜の声を上げる。

（…マジでどうしよう。）

「そうだ三人共紹介忘れてたな。こちら同じクラスの桐崎さん現在一条と付き合ってるそうだ。」

「うえ!?…えっと…桐崎千棘です。よ…よろしく。」

急な紹介に驚くも緊張しながら自己紹介をすると三人の反応は

「フフ…緊張しなくていいよ…小木良太だ。同じ一年よろしくね。」

「ひっ！」

長身キザイケメンの小木は桐崎を壁際まで追い詰め壁ドンしながら自己紹介を済ませ次へとバトンタッチした。

「優雅に！そして大胆に！…副部長の中林優香です同じ一年よ敬語は無しでね。」

「うう…は…はい～」

社交ダンスのように優雅にタンゴのように大胆に桐崎を振り回すモデル顔負け体型の美女。中林優香はクルクルと桐崎を回しながら次へとパスをする。

「大丈夫？…大森巧です。ここの部活全員一年だから敬語は無しでいいよ。よろしくね。」

最後は普通の優男イケメンの大森巧が桐崎を受け止めた。

「で知っての通り俺が部長の大谷優だ。どうだ？桐崎も料理部に入らないか？」

「うん…無理です」

桐崎は曇りのない笑顔で答えた。

4話

桐崎を料理部に勧誘してから少し経ったこの日
今日は調理実習である。

結局あの後桐崎は三人とも仲良くなってどう接すればいいのかもわかったようで友達を作って楽しそうであった。
部活所属はしないが偶に顔を出したいと提案して来て俺は当然拒否することなく了承したのである。

「さてさて…俺の本領を発揮する場がやって来たぜ。」

「全員分を本当に作るの？」

「当然じゃないかサイズは小さくなっても全員分作るよ。」

話しかけて来たのは小野寺の親友の宮本るり。集と同じく何を考えているのかわからないがいい奴だ。
そしてすごい大食いである。

俺自身テンションが上がっていつも以上に張り切っている。
今クラスではバレンタインのように好きな人にケーキを渡すという流れがある。

もしかすると小野寺が渡してくれるのでは?と考えたりもしてたとえ貰えなくても自分は渡そうと思って全員分を作るという名目で作る。

そんな考えをしていた俺の目の端で捉えたものがあった。

「!?…桐崎さん!それだと薄力粉全部こぼすよ!」

「へ?」ドサッ

桐崎が持っていた薄力粉の箱から薄力粉が全部落ちて測りに落とした。

「……９０グラムってこのくらいかな?」

「うそでしょ!?それで続けるの!?」

「い…いやーちょっと多いみたい」

「でしょうね!」

そんな漫才じみたことをしていると桐崎は涙目になってへたり込んだ。

「じ……実は私って……不器用なの!!」

「……ごめん…知ってる。」

「仕方がないでしょ!私ちまちました作業すると体がむず痒くなるの。」

桐崎はコロコロと感情を変えてぐちぐち言うが内心楽しそうに見える。

「そうだ！大谷君手伝ってよ。料理人が手伝ってくれると絶対いいの出来そうだしそれにあのもやーじゃなくてダーリンにギャフンと言わせてやれるわ。」

「お…おう。まぁいいけど。」

最初はそんな感じで軽い気持ちで請け負ったがこれが思いの外大変だった。

「卵をボウルに入れてかき混ぜて」

「わかったわ！」

元気よく返事をする桐崎だが卵を割らずにボウルに入れそのままかき混ぜ殻を取る作業をする羽目になった。

「生地を焼くのよろしくね。」

「わかったわ！」

「そのフライパンは何に使うのかな？」

紆余曲折あり出来上がったケーキはどうすればこんな物が出来るのかと思わせる黒いスポンジケーキが出来た。

「……うっ」

出来上がった黒いスポンジケーキを見て涙を浮かべた。

周りも誰も何も言わず言葉をかけられなかった。

「……これは魔法か何か起きてるな…普通に食えるぞ。」

俺は何のためらいなく味見をして普通に感想を述べた。

「え!?マジかよ…優」

近くに居た楽が驚き慌てて黒ケーキを一口食べると

「うめぇ…」

「だろ?……魔法か何か起きてるのは確かだけど不味くはねぇよ。……あ!…桐崎さんが楽の為に作ったケーキ一番に食っちゃった。」

事に気付いてももう遅かった。

俺は桐崎に謝るも桐崎は俺から顔を逸らした。

「べ…別にいいわよ……手伝ってくれたんだし。」

そのままそっぽを向いて何処かへと走り出してしまった。

「し……しまった絶対に怒ってる…あれ。」

「……まぁそっとしといてやんなよ。」

落ち込む俺に集が肩に手を置いて言った。

桐崎ｓｉｄｅ

調理室から逃げ出した私は正直なんで逃げたのか自分でも分かってなかった。
別に恥ずかしいわけじゃない自分の作った物にも美味しいって言ってもらえて嬉しかった。なのになんでこんなにも自分の鼓動が早くなるのだろう。

「……え」

鏡で見る自分の顔は真っ赤になっていた。

優side

「んん～気を取り直して作るの再開するか、考えても仕方ないし。」

俺は全員分のケーキを再び作り始めてそこまで凝ったものでは無いからあっという間に作り終えて配り始めた。

「ほら宮本に小野寺のも……宮本のやつは大きくしといたぞ食い足りないだろうから。」

「……」ゲシッ

「痛え！何すんだよ宮本」

宮本は無言で俺の足を踏みつけた。

「ありがたいけど一言余計よ。」

「あ…あはは…ありがとね大谷君」

「お…おう。」

小野寺に笑顔で感謝されて俺は直視ができずにいると

「あれあれ～照れてんのか～」

集が後ろからすっと顔を出していじり始めた。

「……」ギリギリ

「無言でアイアンクローやめてください！お前の洒落にならない痛さだから!!」

集の頭を痛めつけたら取り敢えず解放してケーキを渡した。

「楽これはお前のと桐崎さんのな」

「お……俺が渡すのかよ。」

「頼むよ」

「わ…わかった。でも殴られたらお前にありとあらゆるイタズラ仕掛けるからな。」

「小さいなおい」

まぁそんなこんなで調理実習が終わった。

そして楽は案の定殴られて俺に机を前後ろ逆にする。上履きの裏に両面テープを貼る。廊下で肩が当たるなどの陰湿なイタズラをしたけてきた。

5話

調理実習から数日経って現在は放課後

「優…俺ん家に来れないか？」

帰り支度をしていた俺に楽は話しかけてきた。

何でも楽の家で勉強会を始めるそうで女子3人に男子3人で数を合わせたいらしく俺に頼みに来たのである。

当然俺は断る訳なく

「おう、いいぞ。」

二つ返事で返した。

楽の家

「家でっけーなー」

俺は始めて楽の家に来て最初の一言はそれだった。

ヤクザの家の出身で金はあるだろうなと思っていたが和風な立派な家であった。

「あれ？優ってきたことないのか？」

「まぁ知り合ってまだ２ヶ月くらいだしな俺の都合もあったから行けなかったんだ。」

「で？…なんであなた達まで付いてきてるの？舞子君に大谷君。」

今回のメンバーは楽に集に俺に桐崎さん小野寺に宮本と６人でこの企画も宮本が提案したらしく誘ったのは楽だけだが俺らが来たのは想定外だったようだ。

「何でって楽に誘われたからな。」

「まーまーいいじゃないの同じメガネのよしみでさぁ！」

「……」

（あれ絶対なんか意図がありそうだな。）

そんな事を考えながら家の中に招待されおそらくヤクザ達であろういかつい人達が盛大に歓迎していた。

いかつくなければいい人達なんだろうなと俺は思う。

「ん？桐崎さんすごいそわそわしてるけどどうしたの？」

俺の隣で家に入る前から落ち着かない様子の桐崎

「え!?…あーえーと…友達と勉強会って初めてだからさ。ワクワクしててね。」

桐崎は恥ずかしがりながら答える

「それわかるよー俺も初めてだし。」

俺自身中学時代世界を回ってた為まともに日本に居なかったから一緒に勉強なんてしなかったのだ。

「へー大谷君友達多いそうなのにね。」

「まともな中学時代を送らなかったからな～」

前の調理実習の時から少しの間桐崎は俺に顔を合わせようとはしなかったが少しするとまた元に戻って今では普通に会話をする仲だ。

顔を合わせようとはしなかった時は本気で凹んだけど。

「坊ちゃん！茶ァ用意しやしたー」

「おお、龍サンキューな。」

「あ！運ぶの手伝います。」

ガシャン！

お盆に乗った湯呑みを楽は受け取るがそれを手伝おうとした小野寺が手が楽と触れた瞬間２人は大きく手を上げてお盆を上へと打ち上げた。

シュパパパ

そこを俺は落ちてくる湯呑みと中身を全て綺麗にキャッチしてお盆に乗せた。

「セーーフ！」

「「おおおお！」」パチパチ

それを見た集、宮本、桐崎が賞賛の拍手をした。

「わ…悪りぃ優助かった。」

「ご…ごめんね。大谷君。」

「たくっ…気をつけろよ。中身が当たったら火傷するからな。」

謝ってくる2人に俺は注意してそこから勉強会を始めた。

みんなは机を囲み勉強を始める。全員それなりに頭がいい為スラスラと宿題を解いて行く中俺はずっと頭を抱えていた。

「……なぁ、数学ってこんなに難しかったかっけ?」

「難しいが教科書見て当てはめるんだ。だから横になってだらけるな。」

数学を考えただけで嫌気がさして始めて早々倒れる俺はまたゆっくりと上半身を起こしてプリントを見た。

「しかし意外だよな優が勉強苦手なんて。普段の行動見てるとちゃっかり勉強ができそうな感じなのにな。」

「俺は料理だけにスキルを極振りしたからな～数字なんてレシピのグラム数だけで十分だ。」

茶化してくる集に気だるそうに答え頑張ってペンを走らせる。

「他に苦手な教科って何があるの？」

「えーと…現代文に古典に数学、化学物理学英語日本史位だな。逆に世界史は得意だぜ。世界回ってたらその土地の過去とか調べたりしてたからな。」

「主要5教科ほとんどじゃねぇか。」

「英語が苦手って世界回ってたのになんでだよ。」

「喋るだけはできるけど文法とか無理だ。」

そんなこんな話しながら進めて行くが俺は数学の難しい問題のところにあたり手が止まる。

そうしていると後ろから

「それ先にαに代入しないととかないわよ?」

「ん?……桐崎さんまさかだけどもう終わったの?」

「うん、もう終わった。」

「「はやっ!」」

桐崎は全てが埋まっているプリント3枚を見せて証明しなぜか楽はそれを見て落胆していた。

「おお…ほんとだ解けた解けた。すげーな桐崎さん。」

「まぁ向こうでは評価とか成績とかAだったしね。」

桐崎は見た目に反して頭が良いという意外な事実を知りそこからまた再開し始める。

途中小野寺が楽に教えてもらおうとしていたが桐崎が割り込んで教え始めた。

「そういえばさー小野寺さんって好きな人とかいないの？」

桐崎のその一言で楽と小野寺が噴き出した。

「お…お前何言って。」

「なによ…ガールズトークに決まってんじゃない。」

「わ…私は今はそういう人は…」

「そっかー私もまだそうゆう人いなくてさー…漫画みたいに素敵な恋をして見たいのよね～…」

「「……ん？」」

桐崎の一言に一同が静まり返り

「!!…ジョ…ジョーク!!ジョークです今の!!」

「こ…こらひどいぞハニー!僕という人がありながら!!」

楽と桐崎は慌てる様子で口早に話す。

そんな２人を見て俺は疑問に思った事がある。

「そういえばさ…２人ってどうして付き合うようになったの？最初の様子を見るに想像付かなくてさ。」

「いやいや優よ。そんなことよりもっと重要な事があるだろ…ぶっちゃけ2人はどこまでやったかだ!!」

俺の疑問は集に速攻でもみ消されその集が新たに出した質問に2人はまたも噴き出した。

「ど…どこまでとおっしゃいますと?」

「そりゃあもちろんキーー」

「ちょっとお前らこっち来い!」

「なぜ俺も!?」

集の言葉を遮るように楽は俺と集を掴み部屋から引っ張り外へ連れ出した。

連れてこられたのは楽ん家の庭で楽は息を切らせながら

「いいか！この際だから話しておくがよく聞けよ!!」

「「ん？」」

そこから話は実は楽の家のヤクザと桐崎の家のマフィアが抗争が起きないように偽物の恋人を演じているという話であった。

「へーまさかそんなことになっていたとはな。」

「なるほどねーそんな理由で恋人のフリしていたわけか～」

「んだよ。集お前気づいてたのか？」

「なはは…そりゃまぁ見てればな。でもあえて正直にいうと付き合ってる発表した時点から気づいてた。」

「それ最初の最初じゃねえか!!」

「マジかよ。俺なんかさっぱりわかんなかったよ。」

「ははは…優は結構鈍感だからな。」

「ちくしょーわかった上で俺にあんな辱めを～」

「はっはっはっ……んでお前は出来れば小野寺に誤解されたままでいて欲しくないと……」

「そりゃあ…まぁ。」

「なんだだったら簡単じゃねえーか。告白すればいいじゃん。」

「出来るわけないだろ！」

ん？この話の流れを聞いていると俺はなんだか嫌な予感がする。

「そうか？俺は勝算あると思うけどな。…だって小野寺お前の事好きだよ？」

「え？」

俺としてはとても聞きたくない言葉であった。

6話

「おーい…おーい優！」

「はっ！…ど…どうした楽」

「いや…話終わったし戻るんだよ。」

「お…おう。」

どうやら俺はあの言葉を聞いて以降少し意識が離れていたようだ。

しかし、こうなっては俺の恋が叶う確率はほとんど無くなってしまった気がする。

まぁ今考えてもどうしようもないけれど。

部屋に戻ってから勉強を始めるが楽は小野寺が気になって仕方ないようで先程から落ち着かない様子でそわそわしていた。

そして隙間から楽を見ているヤクザさん達。

勉強に戻りたくても気になると事が多すぎて集中が出来ず頭を抱えた。

「?…大谷くんまたわかんないとこにあるの?」

「え?…ま…まぁ証明問題がめんどくさくてな。」

「あー確かにね～でそこはねーーー」

桐崎は待ってましたとばかりに張り切って問題の解き方を解説してくれた。

俺もこの桐崎のご厚意に応えるため無理やり頭の切り替えを始めて勉強に力を入れるようにした。

そのおかげもあってか無事に問題プリントを全て終わらせる事ができたのである。

「だああ～終わった～もう無理!」

頭を使った疲れから俺は倒れ込んだ。
その隣では桐崎が満足からか満遍の笑みでニコニコとしていた。

「桐崎さんまじで助かったわー俺一人でやってると考えると恐ろしいわ。…ありがとうございました。」

「ふっふっふ～こちらこそ～」

そんな上機嫌の中楽の部屋の扉が開いて楽ん家のヤクザさんが楽に内緒話のように要件を話していた。

「わかった……うちの庭にある蔵から茶葉取りに行くからハニー、着いてきてくれるか？」

「ええ～なんで私が～」

「なんか２人で来て欲しいらしいぞ」

「…それなら俺が代わりに行こうか？勉強ばっかで身体ガチガチだから動きたいし。」

２人の話を聞いて俺は自分が行くと提案する。身体を動かしたいのは本当であるし正直さっきの出来事についてあまり考えたくなかったからだ。

「だとよ…俺と優でちょっと行ってくるわ。」

楽も早く行きたいのか決断しそのまま部屋から出ようとすると。

「……やっぱり私も行く。なんか悪いし。」

桐崎は立ち上がり顔をむすーとさせて着いて来た。

「まぁ２人も３人も変わらないだろう。」

「そうだな。よしさっさと行こうぜ。」

素直じゃ無い桐崎に俺らはいじることもせずだが微笑ましく思わずニヤついた。

廊下を歩いていてなんども思っていたがやはりかなり広い家だなと感じていた。

「こんだけ家が広いとさ迷ったりするのか?」

「まぁ何年も住んでるからいい加減覚えたけどちっちゃい頃はしょっちゅう迷ってたな。」

そんな雑談を俺と楽で話していてその後ろに桐崎が着いてくる。

そうして庭に出ると

「広っ!…池とかあるし。」

「鯉もいるわね。なんか自分の家自慢してる感じが鼻に付くわね。」

「俺何も言ってねぇよ!?」

そんな漫才をしていると

「悪りぃちょっと手洗い行ってくる。蔵はあの建物だから扉開けといて待っててくれ。」

「うわぁレディの前で下品な男ね。」

「まぁ…人の生理現象さ大目に見てやれ。」

楽が手洗いに向かって行って、俺たちは楽に言われた通り蔵の扉を開けた。

「……」

「ん?桐崎さん?どうしたんだぼーっとして。」

「えっ!?えーと…あのー…く…暗いところ苦手で。」

「へぇーそっか…じゃあ入り口で待っててていいよ。俺はちょっと中見て見たいし。」

「うん。そうさせてもらうね。」

それにしても桐崎が暗いところが苦手だなんて可愛いところもあるじゃん。そう思いながら蔵に入ると壺から色んなものが置いてある。

「俺の部屋より広いとかまじかよ。」

蔵の中は高さも広さも10人入っても大丈夫な広さでぶっちゃけここ片付ければ人住めるんじゃねと考えもしていた。

「きゃっ!」

ドンッ!ガチャンッ!

「桐崎?」

桐崎の悲鳴が聞こえ振り返ると押されたのかその勢いで俺に抱きついてきた。俺は桐崎を受け止めると蔵の扉が閉まり鍵がかけられていた。

「桐崎さん…怪我ないか?」

扉について調べる前に桐崎が怪我をしていないかを確認を優先させた。受け止めたとはいえ怪我をしていないとは限らないからな。

「う…うん…平気…それよりも私たちここに閉じ込められちゃったの?」

「その様だな…扉から鍵が締められる音が聞こえたし。一応見てみるか。」

俺が扉を調べようと桐崎を離し向かおうとすると桐崎が背中にくっついてきた。この状況でこんな事されると勘違いしてしまうがその考えはすぐに考えなくなった。桐崎の震えが背中に伝わってきたからである。

「そっか…暗いところが苦手だったよな。」

「ごめんなさい…でも怖くて。昔、洗濯機にはまって動けなくなってから暗いところが苦手なの。」

なぜはまってしまったのか気になるところだがこんな状況で聞くことではないと思った。

「でも、ちょっとだけ頑張れるか？扉を確認したいから。」

「うん…頑張ってみるわ」

こうしてゆっくりと桐崎の歩幅に合わせ歩き扉を調べるが。

「やっぱり開かないか。多分楽が来てくれるからそれまで座って待とうか。」

「うん…わかった。早くこないかな。」

手洗いに行っている楽が気づいて来てくれればさすがに開けてくれるはずと信じて待つ事にした。

座る際俺はポケットからハンカチを取り出して地面に敷いた。

「ほら…桐崎さん座っていいよ。」

「え…でも…。」

「大丈夫だよ。後で洗えばいいことだし。それに女性を地べたに座らせるわけにはいかないからな。」

これは修行旅行で訪れた紳士な国で教わったことである。

「ありがとう…後で洗って返すね。」

「おう。」

こうして納得した桐崎は座って俺もその隣に座る。

「そうだ。前に行った国で、暗い所を怖くなく感じさせる方法があるんだ。試しにやってみようか？」

「そうなんだ。…やるだけやろうかな。」

正直話題がなくて困っていた所で暗い所だったのを思い出し砂漠での出来事を思い出していた。

「なんたら砂漠でキャンプしてた時なんだけど。」

「色々と突っ込みたいけど聞かないでおくわ。」

「その時に夜の星空が凄くてな、今でも寝れない時に思い出して寝る様にしてるんだ。

だから、桐崎さんも自分が見た一番綺麗な夜景を、目を閉じて思い出してみればリラックスはできるよ。」

「うーん…あんまりこれと言って感動するほどの夜景は無かったからな～」

「そっか～……そうだ、来月にある行事の遠足でみんなを連れて星空見に行こうよ。」

「…うん、見に行きたいな。友達もいる事だしね。」

こうして話していて桐崎は笑顔になっていた。

「そうさ、こんな暗い蔵よりも、もっと広くて綺麗な星空なんだ誰かと一緒に見れば感動も倍増するもんさ。」

「うん…凄く楽しみになって来た。」

そんなこんなで話し込んでいると扉の外から

「優！ハニー！無事か!?」

「楽！…ああ、２人とも元気だぜ！扉に鍵がかかっているみたいなんだ開けられるか!?」

「すまねえ…なんかうちのが鍵を無くしたらしく壊すから少しだけ待っててくれ！」

「了解。気長に待ってるよ。」

「さっさとしてよね！」

「わかった!!」

その言葉を最後に楽はどこかに走って行った。

「桐崎さん、だいぶ落ち着いたね。」

「うん…まだちょっと怖いけど大谷くんがいるからだいぶ楽になったわ。……ありがと。」

「！…どういたしまして。」

桐崎の笑顔を見て俺は顔が熱くなるのを感じた。

その後、鍵を破壊して外に出ると楽とその家のヤクザさん達が謝罪にきてお詫びとしてお茶菓子をもらいその日の勉強会は解散となった。

自宅

「約束…か。」

部屋の窓を開け春の優しい風が当たる。

空は曇っていて星空は見えないがあの時の桐崎の笑顔が頭から離れなかった。

「楽しみだな。…星空。」

7話

勉強会より数日後

「助っ人をやるの？」

「そうそう宮本さんに誘われて今度の休みに大会出るの。」

廊下で偶然会った桐崎が、水泳道具を持っていた理由を聞いてみるとどうやら水泳の大会に助っ人として出るらしく今日もこれからプールで練習らしい。

「大谷くんも暇があったら見にきてね。私の華麗な泳ぎを披露してあげるから。」

「そうだな。プール道具を持ってないし、観客席から見学させてもらうよ。」

「うん…それじゃあね！」

桐崎はそう言って鼻歌交じりのスキップをしながら室内プールへと向かって行く。
俺もプールに最後に入ったのはいつか思い出せないな。

２階観客席

俺は観客席の階段を上がろうとした瞬間、すでに誰かが居る気配を感じた。
俺は気配を消しながら階段を登り極力音を立てない様に服の擦れる音すら消して登り２階観客席を覗いた。

そこには鼻血を抑えながら顔を赤くしながら手に持つ双眼鏡でプールを見ている白スーツの外国人男性が居た。
側から見てとんでもない不審者だった。

そのまま気配を消しながら外国人男性の後ろの椅子に座って肩を叩いた。

「すみません…どちらさーーー」

その動きは一瞬だった肩を叩いた手を掴まれそのまま地面に倒され額に銃口を突きつけられていた。

体の震えが止まらなかった。次の瞬間には自分が撃たれている想像までさせられて指一本として動かせなかった。

「……貴様何処の組の者だ。」

「…く…組って?なんの話だよ。」

「しらばっくれるつもりか…私の背後を取るような者は只者じゃない事くらいわかる。」

「そんな事言われましても…い…一応…1年C組の大谷　優と申します。証拠なら胸ポケットに学生証が入ってますので。」

「……大谷優？」

そう呟いて外国人男性は俺を抑えていた手を離し胸ポケットにある学生証を取り出し確認すると

「どうやら本当のようだな。しかし、気配を消すなど高校生が出来るようなことではない。貴様一体何をしてきた。」

「料理です。」

解放された俺は立ち上がりながらも答え背中のゴミを叩いた。

その間も外国人男性は俺の事を警戒して目を離さなかった。

「…まぁいい、冗談で手の内を晒さないところ、考える頭はあるようだな。」

「いやだから、料理ですって。」

「しかし、今後は気配を消して背後に現れない事だな。相手のためにもそして、自分のためにもな。」

「いや、鼻血出して双眼鏡で覗いていたあんたにだけは言われたくねぇよ。」

と言うかなぜ俺はこの人に怒られてるのか不思議でならない。

「ふん…今日のところはここで消えてやる。それと今後は私を見かけても話しかけないようにな。」

そう言って外国人男性は一瞬で姿を消した。

「〜〜〜ップハー…緊張した〜マジで死ぬかと思った。」

俺は緊張から解き放たれて地面に腰をついた。

こんな死と隣り合わせなのは修行旅以来だ。

「にしてもマジで誰だったんだろうか。外国人って言えば桐崎さんだけど。……って、拳銃って銃刀法違反じゃん！」

冷静に考えてみると日本で拳銃所持は免許無しでは犯罪である。まったく日本の警察は何をしているのやら。

その後プールを見てみると桐崎がこちらに気づき思いっきり手を振ったり。その隣で泳いでいる小野寺が楽の手を掴んで泳ぎを練習しているところを見て少し嫉妬したり。集が宮本に殴られ飛んだりと色々すごかった。

翌日

この日練習試合で桐崎に観に行くと約束したためしっかりと水着を着用して室内プールに入って行く。

「おはよう、桐崎さんに楽も」

プール室内に入ると入り口近くに学校指定の水着を着た楽と桐崎が早速口喧嘩していた。

「おお！優も来たのか…って何だ！そのでっかい傷！」

「おはよう…筋肉すごいわね。」

２人が注目する俺の体には胸筋辺りにある３本の切り傷、そして旅で鍛えた強靭な肉体。

「ん？筋肉は海外旅してたら勝手についてて。この傷は雪山の狼にやられてな。いや～大変だったな～」

「本当に昔何してたの。」

「料理だ。」

俺の自信満々で答えは2人にとって納得はいかないようだ。

「じゃあ、俺の知ってる料理じゃねぇな。」

「そうね。ダーリンのもやしを見ればよくわかるわ。」

「なんだと!?」

「なによ!」

なぜすぐに喧嘩を始めるんだか。

急な大声で周りの視線を集めてしまうし。

「ほらほら2人とも、周りに迷惑だから喧嘩はやめなさい。それに桐崎さんは、試合でるんだから準備運動しなきゃな。」

「ほら!優だって準備体操必要だって言ってるだろ!しっかりとやりなさい。」

「うう…わ…わかったわよ。」

「俺らも一緒にやるからそう腐らないで。」

こうして3人で準備体操をしていると今度は小野寺と宮本がやって来た。

「おはよう、桐崎さん、一条くん、大谷くん。」

そう言って歩いてくる小野寺は学校指定水着…なんかいいね。

「お…おはよう小野寺。その…大丈夫か?」

「うん多分!大丈夫。昨日お風呂でイメージトレーニングしたし。」

「そうか…とにかく今日は２５メートル泳ぎきる事が目標だからな。」

「うん、ありがとう頑張るね！」

楽と小野寺の話は昨日の練習があったから俺は話には入らずに蚊帳の外だった。

「何よこの私との態度の違いは。」

「なんでだろうね？」

話に夢中になってる楽には聞こえてないようだが準備体操を続ける桐崎がボソッと呟いて俺はそれに相槌を打つしかなかった。

ここでお互いが意識しているからだよ。とか俺の口からは言いたくなかった。ただでさえ見ていて辛い思いをしているのにこれ以上はなにも考えたくなかった。

「大谷くんは変人という名の紳士だから大丈夫よね？」

「その変人というのがなければ素直に大丈夫って言えるんだけどな。」

「変人っていうのは別に変な意味じゃないわよ。お人好しすぎてそれでいて優しい良い人って事で変人。」

「変人要素がいまいちわからないけど、あの桐崎さんがそこまで言ってくれるのは嬉しいよ。」

「あのってどういう意味かしら？」

「さぁ？…どうでしょうね？」

桐崎と準備体操をしながら話をしてとても楽しかった。

話している間は胸が締め付けられる辛さはなかった。

「さて、準備運動も終わったし受付行ってくるね。大谷くん、私の勇姿を見ときなさい。」

「ああ、期待してるよ。ちゃんと目に焼き付けとくから。」

そう言って俺は桐崎を見送りプールの端っこに腰を下ろした。
そうしていると隣に宮本がやって来た。

「桐崎さんと随分仲が良さそうね。」

宮本の言葉には質問として言っているが、その表情は普通な顔をして疑いの顔と俺は見切った。

「まぁ、友達として応援はしないとな。」

宮本はかなり察する能力がすごいためあくまで自然に落ち着いて答えた。
というか普通な顔して疑いの目とかすごいな。ポーカーとか強そうだな。

「……あなたの顔は本当に読めないわね。率直に聞くわ一条くんと桐崎さんあの２人の関係はどう思うの？」

やはり疑っていたか。…まぁあの２人の演技で信じ込んでいる奴の方がどうかして

るがな。

「お似合いのカップルだよな……って言ったら怒る？」

ゴスッ

「ーーーーッ!?」

「大丈夫か？宮本。」

俺の答えに不満を持って俺の脛を蹴ったのだが蹴った足の方が痛み宮本は足を抱えた。

「く～～なんなのその硬さ。あとなんか知ってるのに教えないその姿勢が腹立つ。」

「ハァ……なら聞けばば良いじゃん桐崎さんに直接、友達なんだから。」

「聞ければ苦労しないわよ。」

「でも、他人からその事情を聞いて首を突っ込むものじゃないよ。やっぱり本人から聞かないと意味はないよ。」

「……ムカつく。もういいわ今度本人に聞くから。」

「おう、頑張れよ。」

そう言って宮本は離れて行き楽の方へと歩いて行った。

俺は一体何をしてるんだから。多分だが宮本も小野寺が楽のことを好きだというのを分かっているからあんな質問をして来たんだろう。……深読みしすぎかな？

それでも俺の胸は締め付けられるように苦しかった。

その後、練習試合は滞りなく進みその中で桐崎はとてもいい結果を出しとても嬉しそうにしていた彼女の顔がとても綺麗に思えた。

俺はとても醜く思えた。手に入らないと分かればすぐに移り変えようと思っている自分が醜いと思った。

8話

料理部部室

「ハァ～……」

俺は今日何回目かわからないため息を煮込みをしながらしていた。

「お…おい、先程から部長がずっとため息ばっかりだぞ。」

「何か悩んでいるようですね。」

「聞いてみるかい？」

小林、中林、大森と3人が離れたところで先程からずっと、心配するかのように円陣を組んで話していた。

全部聞こえているけどな。

このため息の原因はわかっていた。俺は小野寺が好きだった筈なのに、周りから察するに小野寺は楽の事が好きらしく。

それを知って、俺はよく話す桐崎を意識するようになっていて、そんな早く変わってしまう恋心なんて本気な筈がないと思い罪悪感がいっぱいなのだ。

「ハァ〜…」

「また、ため息だ。」

「もういっそ聞く?」

「ここは素直に聞くが一番だね。」

丸聞こえの3人は俺に向かい。

「「煮込みすぎてますが大丈夫ですか!?」」

「聞かねぇのかよ!!」

そうツッコミ俺は火を止め3人に向かい合う。

「もう面倒だから話すけど。相談乗ってもらえない？」

「え？もしかして海外の彼女達が部長をかけて天下一の武道大会を開く事か？」

「それとも、海外で潰したマフィアの報復にですか？」

「それとも、海外で修行した料理マスター達に免許皆伝の為に家に押しかけられてる事かな？」

「なんだそのデマだらけの情報!?誰がそんなこと言ってた！」

「「とある情報屋から。」」

「今すぐそいつを止めろ！じゃないと有る事無い事噂が立っちまう！」

「「いやもう手遅れですよ。上の人達も知ってるくらいですし。」」

「今すぐ情報屋の名前を言え。とっ捕まえて出汁にしてやる。」

「「そんなことよりも相談ってなんですか？」」

「ちくしょう悩みのタネが増えてしまった。」

そんなこんなの放課後が過ぎて結局話せず今日は解散となった。

「しまった。教室に忘れものしてた。」

部活終わりに俺は教室にサイフを机に忘れていたのを思い出し教室へと向かっていた。

ビュン!!ドドドド!

「?…宮本か?何を急いで走ってるんだ?」

教室から凄い勢いで出て走り出した宮本を見つけて驚いたが教室に向かうと何故か戻ってきて教室を下の方から睨んでいた。

「…ッ!?…大谷くん!?ちょっとしゃがんでて!」

「うおっと。」

小声で迫力のある声で言う宮本に掴まれ教室から見えないように隠れた。

「一体何があるんだ?」

「いいから黙ってなさい。大事なところなんだから。」

そう言って宮本は俺を睨み動かないように服を掴んでいた。
そんな中教室から声が聞こえた。

「小野寺……？」

「…一条君、私、実はね今までずっと言えなかったんだけど……私ずっと一条君の事……」

中にいるのは小野寺と楽。
それに気づき俺は、ゆっくりと壁に背を預けゆっくり上を見上げた。
向かいの窓から見える空は赤くそれがとても鬱陶しく感じた。

「…す…「ガシャアアアン!!」……」

突如ガラスが割れて大きな音が鳴った。
２人はその音に驚き机にもたれた。

「……嘘でしょ。ここでそんなこと起きるの？」

隣で宮本がぐちぐち言っているが俺には聞こえてなかった。

俺は周りを気にせずに立ち去る。

「……大谷君？」

宮本のそんな声は聞こえなかった。

俺はとにかく走った。

桐崎サイド

私は最近とても楽しい学校生活を送れている。

転校初日に色々あって家のこともあって最初は、あまり友達が出来なかった。それもこれも全部あのもやしのせい!!

でも、そんなもやしの隣にいた彼と会ってから物事がよく進むようになった。
彼は悩んでいた友達との問題を一緒に考えてくれた。変人だけど友達もできて普通の友達もできた。一緒にケーキも作ってくれた。怖かった暗い場所で一緒に居てくれた。私の事をしっかりと考えてくれていた。
そんな彼を私はよくまで追っていた。
放課後に見つけたもやしのチェーンの切れた錠のついたネックレスを見つけた。私はそれを、家の部下の人に頼んで直してもらいそれをもやしの家に届けたのである。
最近気分がいいから気まぐれで届けてあげたわ。

「…どうでしたかお嬢、俺の直したペンダントは。」

「うんバッチリ、ダーリン全然気づかなかったわ。」

「ええ?いいんスか気づいてもらわなくて…」

「いいのよ、これで…てか、前向く!!危ないでーー」

ガシャン!!

嘘でしょ、本当に事故起こした!?

「テメェらどこに目をーー」

ドンドンッ!

ビチャッ

「…え?」

私の顔に何かがついた。それは鉄臭い匂いだった。

目の前には赤い模様が見えた。

ドアの外には黒いヘルメットをつけた人たちがガラスを割っていた。

「こっちに来い!袋を被せろ。」

事故のショックで頭の思考が追いつかなくなすすべなく袋を被せられた。
次に気付いけば椅子に縛り付けられていた。周りは海の音が聞こえる物置工場であった。

9話

桐崎ｓｉｄｅ

気がついたら私は物置工場に居た。
だんだんとどうしてこうなったのかを考えられるようになった。
帰り道の車で事故が起きてそして2人が撃たれーー

「う…おぇぇぇぇ。」

腹から込み上げてくるものを私は戻してしまった。

「うわっ汚ねっ！」

「大方死体を思い出して吐いたんだろ。うちらの業界じゃ日常茶飯事だってのに、相当な温室育ちのようだな。」

「温室って事は余程大事にされているんだろうぜ。」

「そりゃあ、ボスの娘だもんな。」

思いっきり吐き出してまた周りを見たら、周りには複数の男達が囲んで居た。それぞれが鉄パイプや腰には拳銃などと絶対に一般人ではないのがすぐにわかった。その中に明らかにこの人達のボスが風格でわかった。

その男はハットをかぶっていてその人の身なりだけスーツであったことですぐに分かった。

当然、私のケータイは無くなってて椅子に縛り付けられいる。

「ううう……だ…誰なのあなた達は。」

体は震えて恐怖でどうにかなってしまいそうだったけど、私は声を出し尋ねた。

「温室育ちの嬢ちゃんには俺たちの事噂すら知らないようだな。」

「嬢ちゃん、あんたはこのマークを一度でも見たことあるかい？」

そう言って見せたのは服についてるバッジでそこには黒カラスのマークがあった。

「……み…見たことないわ。」

「やっぱりか。…これは俺たちが所属していた組織のマークさ。」

「……所属していた？」

「なんとなく察する事は出来るでしょう。君の今置かれている状況とかさ。」

「……うちなのね…組織を……潰したのって。……」

なんとなくわかってしまった。

私の家はマフィアで抗争など起こし血生臭い事を行なっていたりしている。私はそ

れを知らないで育ってきた。
　この人達は、私の知らないところで私の家の人達に潰されて、復讐として私は拉致されてしまった。

「頭の回る嬢ちゃんで助かるよ。…分かってはいるが一応、言っておくとあまり暴れない方が痛い目に遭わなくて済むからな。」

「わ……私は死ぬの？」

「それは嬢ちゃん次第だぜ。」

　私はその言葉を聞いて全身に鳥肌が立った。
　その言葉は私が彼らの意にそぐわなければ直ぐに殺されるという事だった。
　私の家を恨むような人達だ。殺す事なんて何とも思わずにやれるのだから私には死が近くにいるという事にさらに恐怖を感じた。

「……」

恐怖のあまりについに声を出す事すら出来なかった。
悪い夢なら早く覚めてほしいと願う。そう考えてから私は目を閉じて思った。

助けて……と。

誰でも良かった。助けてくれるなら誰でもいい。

助けて！

そう願った途端

ダンダンッ！

遠くから銃声が鳴った。

「一体何が起きた!!」

「敵襲だ!!…気をつけーーー。」

ここはとても広い倉庫でたくさんの物を挟んだ遠くからその声が聞こえた。

「今の奴がやられたって事は見張りも全員やれてる筈だ。ここに数人残してあとは、敵を探して来い。」

ボスである男が、指示をして部下に探しに行かせてこの場には2人が残った。

ドンガシャンッ!!

探しに向かった男達が視界から消えてから、すぐに何か大きな物を落とした音が鳴った。

「おい!どうした!!」

ボスが音のなる方に向かって数歩歩いて声を出していると私の隣にいた男が私の視界外に首を絞められ声を出さずに連れ去られた。
私は怖くなった。未だ姿を現さない謎の存在に対して。
私を助けに来たのか目的も不明であることがとても怖かった。
「!?…おい、嬢ちゃん俺の部下はどこ行った。」
「!?……」
その言葉はとても冷たく冷酷な声で私はそれを聞いただけで声が出なかった。
「どこかって聞いてんだよ!!」
「……っ!?」
痺れを切らしたボスは私の額に銃口を突きつけた。
私の額に当たる冷たい物体に怖くて目を瞑る。

でも、その感触はすぐになくなった。

「女の子に向けるべきもんじゃねえな。」

「!?テメェ！何モンだ！……」

「危ねぇだろうが。」

「ゴホッ……や…やめーーー」

ガシャンッ!!

そんな音が聞こえて気づいた。

今目の前に誰かがいる。

この組織を1人？で倒してしまった人がすぐそこに。

でも、同時にその声に聞き覚えがあった。

「大丈夫か？…桐崎さん。」

私はその声に救われた。

聞き間違いではない、友達を作るのに苦労してた私に変な友達を作る場をくれた人。

一緒にケーキを作ってくれた人。暗い所に一緒に居てくれた人。私の事を考えて居てくれた人。

目を開けるとその彼は……大谷君が目の前に居た。

震える手で私の頭に手を置き笑顔で居てくれた。

１０話

大谷ｓｉｄｅ

俺は走ったとにかく走った。体力なんて御構い無しに。
辛かった、知ってしまって本当に辛い、自分が好いている彼女は俺ではない他の相手を好いていて、それを知ってしまった事が。
こんな気持ちは一度も無かった。
こんな体が軽く胸を締め付けられる思いは。
これが失恋。

どのくらい走ったのだろう。
自分が走った中では一番走ったのではないだろうか。
走り疲れ息を整えて周りを見てみると辺りは暗くかなりの時間走ったのだとわかる。
場所は漁港でこの時間は人があまり居なかった。
夜の砂浜は危険だが俺は砂浜に降りた。

思いっきり叫びたかったが近所迷惑になりそうだしやめて、ただ海を見ていた。
この広い地球の中俺は失恋をした。地球規模で観ると小さい事だが自分にとってはとても大きかった。
そう考えていると目が熱かった。
そして俺は久し振りに泣いた。

しばらく泣いたら少しはスッキリして悟りを開いたかのように気持ちが健やかだった。
そうして冷静になった俺はここがどこだかようやく調べることにしてケータイを出そうとすると。
「おい！さっさとそいつを運べ！もたもたしてんじゃねぇ！」

「これでようやく俺たちの復讐ができる。」

すぐ近くの物置工場から聞こえてきた。

「お前達は外を見張れ。来た奴は誰であろうと殺せ。」

いやいやいや、殺せ？マジモンのヤバいやつじゃん。

とりあえず、警察に電話しないと。

そう思ってケータイの画面から緊急連絡の１１０番を押して警察へ連絡を入れた。

連絡を済むと警察からその場から離れて下さいと言われたからまず安全第一として離れるため気配を消して歩く。

「これでようやくビーハイブに復讐が出来るな。」

「ああ、しかし惜しいよな。あんな若くかわいい子があそこのボスの娘じゃ無ければ、こんな思いをせずに済んだってのに。」

「確か、桐崎千棘だったか？」

その会話に俺は足を止めた。

「ああ、生きていれば俺の娘と同い年だったよ。あの時ほど後悔した日はねぇな。」

「仕方ねぇよ。この仕事柄有り得ない事じゃないからな。」

「あの嬢ちゃんもあと数時間の命か。」

「……」

数時間の命？その言葉に俺の中で何かが弾けた気がした

俺はその場から離れるのではなく工場に向かい歩き出した。

気配を消し入り口を守っている２人の男の後ろを取るべく、横から屋根に登り男達の真上に立った。

「……行くか。」

そう呟き屋根から足を下ろし飛び降り

ドドンッ！

頭を掴み胴体を地面に叩きつけうつ伏せにし、気を失わせるために頭を蹴り脳を揺らした。

「……」

勢いだけの行動でやってしまったがそれを後悔する前に俺は行動をする。男達を運び隠してから俺は倉庫へと入った。

倉庫内は物が段になっていて俺はそれに登り移動し上から相手を確認する。

倉庫内をうろついているのは3人で倉庫の中心で桐崎を囲んでいるのが4人合計で7人と確認した。

「……意外と少ないな。」

そこからの行動はうろついている男を２人上から飛び降り着地と同時に地面に叩きつけ気を失わせた。

しかし、２人目の男を倒したところで

ダンダンッ!!

「…敵襲だ!…気をつけーー」

「あぶねえな!」

威嚇射撃で撃って来た３人目の男は大声を上げるが、２人目の男が持っていた鉄パイプを拾い距離を一気に詰めて、大ぶりの一撃を顔面に振りかぶった。

「…ハァ…ハァ…危なかった。威嚇じゃなきゃ死んでた。」

そこからまた荷物に登り隠れた。
震える手を抑えて動き続けた。
中央から離れた2人に向かい荷物を落とし潰し動きを封じた。
そこから走り真逆へ 走り背後を取り桐崎に1番近い男の首を絞め口に手を当て声を出させず引きずり連れ去る。

「どこかって聞いてんだよ!!」

男を隠しまた走り背後を取りハットの男から拳銃を取り上げ

「女の子に向けるべきもんじゃねぇな。」

「!?テメェ！何モンだーー」

「危ねぇだろうが。」

こちらを振り向いた瞬間に腹に拳を打ち込み

「ゴホッ…や…やめーー」

男を持ち上げ荷物に向かって投げる。

ガシャンッ！

男は音を立てて荷物に突っ込む。

「大丈夫か？桐崎さん。」

震えて目を瞑っている彼女に声をかけ安心させるために震える手で頭を撫でた。

「…！…お…大谷君…！。」

桐崎はその目から涙が流れて震え声であった。

「縄外すからちょっと待っててくれ。警察も読んだから安心してくれ。」

俺はそう言って後ろで縛られていた縄を腕力で引きちぎる。

「大谷君！」

「うおっと…桐崎さん？」

桐崎は縄が放たれると振り向き抱きついて来た。

触れるとわかる体の震えに気づき俺は桐崎の頭を撫でた。

「よく頑張ったよ。…こんな所さっさと出よう。」

「うん…うん！」

俺は桐崎の手を取って歩き出す。

しかし、そうすんなりとうまくは行かなかった。

「…待てよ。」

「!?」

突然聞こえたその声は俺のすぐ後ろからで、声の主は俺の肩を掴んでいた。

「…そいつを置いてけッ！」

「ガハッ……」

ガシャンッ

ハットの男は俺を引いて正面から顔面に拳を打ち込んだ。

俺はそのが予想外の威力でヨロヨロと後ろに倒れた。

「テメェには……ねぇだろ！…決死の覚悟は!!」

「ぐッ……ガハッ…は…離…せ」

ハット男は俺の上に乗り両手で首を絞めた。

「こいつらの思いをお前は知らねえだろ!!奴等のせいで家族を失った悲しみを!!」

「んなこと…知る…かよ」

俺も両手を離すためもがくが一向に外れる気がしない。

「テメェみたいな部外者に邪魔されてたまるかよ!」

「…くそッ」

息がかなり危ないと感じたその時、彼女は動いていた。

「そ…その人を離しなさい!!」

震え声の桐崎はハットの男に向かって銃口を向けていた。

11話

桐崎side

捕まっていた私の前に現れたのは震える手で頭を撫でて無理した笑みを浮かべた大谷君だった。

その彼は今、ハットの男にマウントを取られ首を絞められている所だった。

咄嗟のことで動けずそして恐怖から見ているだけだった。

「ハァ……ハァ…」

恐怖からか息が早くなって頭の整理が追いつかなかった。

そこで目の端で捉えたのがハットの男の拳銃が地面に落ちているところであった。

「ハァ…ハァ……」

それを見て思った事は普通はしない事。
しては行けない事だと頭でわかっているはずなのに考えるより先に体が動いた。
思ったよりも体はスムーズに動いて落ちていた拳銃を拾い上げるとそのまま両手で握って銃口を向けた。
「そ…その人を離しなさい！」
彼をーー大谷君を救うためを思い大声が出た。
「……」
なのに、ハットの男はこちらを振り向きもせずに大谷君の首を締め付けている。
聞こえていないはずはない。
「そ…その人を離さないと…う…撃つわよ!!」

今度は聞こえるように大声を出すがハットの男はこちらを向かない。

「嬢ちゃんには撃てねえよ。」

!?……」

「嬢ちゃんはこっちの血生臭い世界を知らない。それだけで引き金の重さが違うのさ。」

ハットの男の言う通り私は銃口を向ける事はできても引き金を引く事は出来ない。震える手がそれを表していた。

「……に…げろ。きり…さき」

「っ!?」

「この死に損ないが！まだくたばらねえか。」

「カハッ！」

こんな状況にまでなっても大谷君は自分よりも私を気にしていた。
その強さに触れて私の手の震えも止まっていた。

ダンッ！

気がつけば私は引き金を引いていた。

「…っ!?」

「次は…当てるわ。…もう一度言うわよ…その人を離さない。」

私は淡々と出てくる言葉に自分で驚いていた。
私は冷静だった。撃つことに対して躊躇いもなく引き金を引けた。

「……この…クソガ「力を緩めたな。」…なっ!?」

私の方へと振り向くハットの男はその手を離して向こうとするが、その腕を大谷君は掴んだ。

「フンッ!」

「がっ!」

大谷君は掴んだ腕を引いて顔面に頭突きを食らわせた。

顔面の衝撃で後ろによろけて大谷君の上から離れた。

すぐに大谷君は立ち上がり右足の蹴りでハットの男の頭にぶつけ地面に叩きつけた。

「はぁ…手荒いけど顎狙って脳震盪させた。多分死にはしないはずだ。」

息を切らしながらよろよろと歩く大谷君を見て私は安心した。

しかし、それと同時に急に体が震えだした。

「…っ!!!」

カランッ

そんな音を立てて私の手から拳銃を落とした。
私は大谷君を守るためと銃を手にした自分に恐怖していた。
自分ですら気づかなかった一面に人を殺す事に躊躇いのないあの自分に。

「っ!……」

地面に崩れ落ちて私は震えるだけだった。

「…ありがとう桐崎さん」

ギュッ

そう言って私の手を大谷君は握った。

「でも…私……大谷君を守ろうと思っていたのに…拳銃を手にするなんて。」

「ごめん…俺がしっかりしていれば桐崎さんにそんな思いをさせないで済んだのにね。」

「大谷君が謝る事じゃないよ。…私、あなたがが来てくれて嬉しかった。」

「…無事でよかった。…さぁ、こんなところからさっさと逃げよう。」

そう言って大谷君は私の手を取ったが

「あれ?…足が震えて立てそうにないんだけと。どうしよう。」

「じゃあ、背中に乗って…大丈夫だよ俺鍛えてるから。」

「…それって私が重いって聞こえるけど?」

「そう捉えますか。」

そんなことも言いつつ私は大谷君の背中に乗ると私を揺らさないように歩いてそのまま工場から出て行った。

大谷君の背中はとても安心してとても暖かかった。

そして自分の顔が熱く感じるのもそのせいだと思う。

しかし

「出てきだぞ!!確保しろ!!」

道路に出た途端沢山の車のライトに照らされそこから一斉に聞こえてくる聞いたことのある大声に囲まれていた。

「お嬢ぉぉぉぉぉぉ!!!!」

「な…なんだ!?」

沢山の男だとの中から1人すごいスピードで飛び出てきて。

「この腐れ外道がぁぁぁ!!」

大谷君のお腹にものすごい衝撃が来てそのまま大谷君は背負っている私を気遣ってか前に膝をつけてゆっくりと倒れて行った。

「お…大谷くん!!」

「お嬢!大丈夫ですか!?」

「その声…つぐみ!?」

「はい!お嬢!ご無事で何よりです!!!今すぐこの男を始末しますの「この…バカぁぁぁぁ!!」へぶっ!」

私は銃を突きつけたつぐみに全力でビンタをぶつけた。

12話

これは夢だ。
夢だと自覚してここにいる。

ここは、かつて俺が偶然訪れた最後の国で紛争地域であった。
街のどこかで銃声が聞こえる街。
ここでは、誰が死んでもおかしくない場所、そんな所に中学生の俺が居たのは現実を知ろうと思ったからだ。

こんな紛争があっても他の国では知らん顔、戦争は醜いとか言ってる奴は現地にほとんど来ない。

この紛争は俺が居たくらいでは止まらない。
俺が感じたのはこの世のどうにもならない事が沢山ある。

「星を見に行こうよ」

そう言えばあの国に居た彼女はどうなったんだっけ？

桐崎宅　寝室

目が醒めると見たことのない天井であった。

窓の外を見ると暗くてまだ寝れそうだなと思いベットに再び横になるが。

「いや！ここどこだよ！」

ベットから飛び起きた。

「おお!?起きた様だな、ちょっと待ってろ呼んでくるからよ。」

「え？誰!?」

同じ部屋には強面な男性がいて扉から出て行った。
しばらくすると、部屋に沢山の強面男性が入ってきて大所帯となっていた。

「あ！覗き魔！」

「んなっ!?な…なんて名前で呼ぶんだ！」

「く…クロードさん…」

「ち…違うあれは護衛であって」

仲間への釈明に追われるプールの見学場所で鼻血を流して見ていた銃刀法違反の外国人も居た。

ドドドドドドッ！

今度は廊下の方からもの凄い足音が聞こえ勢い良く扉が開いた。

ドガンッ！

ドアを開けるとは思えない音が聞こえる方を見ると。

「ハァ…大谷くん！大丈夫!?怪我してない!?どこか痛いところとかない!?」

「大丈夫だから！揺らすのやめて！」

息が上がってテンションが高い桐崎が勢い良く俺を掴み揺らしてくる。どうでも良いが彼女の自宅なのだろうから部屋着も結構ラフであるが可愛かった。

「大変申し訳ございませんでしたぁぁ!!」

「今度はなんだ！」

今度はブレザーを着た男顔の女性が現れジャンピング土下座をかました。
いつのまにか部屋はわらわらと人で溢れていた。
そうこうしていると急に周りが静かになった。

「ボス…彼が目をさましました。」

「ああ…わかってるよ。それより千棘と彼と3人にしてくれるかい?」

その言葉に周りの人達と土下座の彼女もぞろぞろと歩いて廊下に出て行った。
先程から感じていたがこの人は言葉で表せないオーラを持っていた。

「さて、大谷くん。まずはじめに…ありがとう。私は千棘の父…アーデルト・桐崎・ウォグナーだ。この度は娘を救ってくれて本当にありがとう。」

桐崎の父であるアーデルトさんは俺に頭を下げ感謝の言葉を並べた。

「い…いえ、その友達を助けるのは当たり前のことなんで。放っては置けませんでした

し。」

「……ありがとう。」

ベットの側にいた桐崎さんは俺の言葉に顔を赤くしてそっぽを向いていた。
その姿に俺は本当に彼女は可愛いなと思っていたが、同時にフラれたからすぐに次に乗り換えようとしている自分に嫌気がさした。

「しかし、君は何故あの時あの場所に居たのかい？それに、君が相手をしたのは曲がりなりにもギャング達だ。彼らを見た限り全員を絞め落としているその技術も何処で手に入れて居たのか、とても気になるよ。」

「あ〜、まぁ時間もありますし話しますとーーー」

俺はそこから、フラれた勢いで走ったことや（流石に相手の名前は伏せて）、自分がかつて回った世界でさまざまな事を習ったことも話した。

「ふむ…偶然にしても良く出来ている。」

!?パパ…彼は…大谷くんは嘘をつくような人じゃないわよ!!」

「千棘…わかっているよ。でも仕事柄一応全部を信用は出来ないんだ。」

そういえば桐崎さんの家って確かギャングなんだよな。

まぁ俺は裏の世界については足を踏み入れるようなことはしたくないけど。

「あの一応聞きますけど…締め上げたあのギャング達はどうなりました?」

「……あまり聞かない方がいいよ。…君たちは若いんだから。」

俺の質問に優しく答えてくれるがその声にはドス黒い感情も含まれていた。

さすがはギャング達のボスというだけあって迫力が違かった。

「さて…今日はもう遅いからここに泊まっていくといい。君の親にも連絡はしておいて

あるからね。」

「え…あ、はい。ありがとうございます。」

手回しの早さに驚きながら俺はお礼を言うとアーデルトさんは部屋を出て行って部屋に残ったのは俺と桐崎さんだけだった。

部屋に女の子と2人っきりというシチュエーションにドキドキしながら何も話さずにいると。

「大谷くん…ありがとう……私、捕まってる時にほとんど諦めてたの…ここで私死んじゃうんだって。」

そう言って桐崎さんは体を震わしていた。

死にそうになった記憶はまず忘れられる筈はない。

「でもね。大谷くんが前に来てくれてとても安心できた。あなたといると、とても安心するの。」

そう言って桐崎さんは俺の手を握る。
震えていた体は少しずつ収まりゆっくりと俺の方にもたれる。
「え…ちょ…ちょっと桐崎さん?」
「……」
桐崎さんは俺の両肩を押して押し倒した。
そしてゆっくりと顔が近づいて来てーーー
「改めましてぇぇぇぇ!!すみませんでしたぁぁぁぁぁ!!!」
突然開けられた扉に俺と桐崎さんは勢いよく飛び上がり俺は腕立て伏せを始め桐崎さんはその上に乗っていた。
「すす…すごいわね!私乗っけても大丈夫なんて!!」

「鍛えてるからな!!」

めちゃくちゃな早口で腕立て伏せして入ってきた男装女子はまたもジャンピング土下座とすごい空間になった。

その後、彼女と話し合い仲良くなり今度同じクラスに転校してくるらしい。名前は鵜誠士郎だと…１００％男に間違われるなと思った。

さっきのあの時は深夜のおかしなテンションの所為だと俺は勝手に決めつけた。

13話

桐崎さんの家に泊まった翌日。

何事も無く歩く通学路…昨日までの出来事なんて感じさせない日常だった。

桐崎さん家の朝飯美味かったなとか考えながら平和を満喫していたが。

「おはよう大谷…学校サボった罰で放課後屋外プール掃除な。よろしく」

「マジかよ…キョーコちゃん先生あの広さを1人で!?」

「頑張れよ〜」

「嘘だろ〜」

俺の反論も虚しくこれはもう決定事項であった。

肩を落としながら向かう教室は妙にざわついていた。

「おーすッ優、朝から災難だな～」

「ああ、そうだな。なるべく触れて欲しくないから別の話題がいいな～」ギリギリ

「ゴメン！悪かったからアイアンクロー外して!!」

いつものノリで話してくる集を一蹴する。

「それよりも何だ？このザワつき。」

アイアンクローを外してどうせ何かを知っているであろう集に聞いてみると

「なんだか今日転校生が来るみたいよ。」

「お…おう…そ…そうか、おはよう桐崎さん。」

「おはよう」

話に割って入ってきた桐崎さんに驚きもやはりいつも通りではいられなかった。自分の顔が赤くなっているのも自分でわかった。

それに比べて桐崎さんはいつも通りでやっぱり昨日のは深夜の状況が起こしたものなんだなと1人相撲しているんだなと思った。

「転校生か…」

転校生と聞いて鵜の事だろうと思い話を聞いていると。

「らしーよ。なんか突然決まった事らしくてさ…生徒にゃ通知が遅れたんだと。」

「…なんかさこの勢いだとあと1人くらい転校生今後来そうだよな。」

「それありそう。」

いつのまにか集まっていた楽に集と桐崎さんが談笑している。
本当にこんな会話をしている事に平和を感じて自分の心も癒されていた。

「しかもその転校生〝男〟なんだとよしかも噂によれば〝美男子〟!!…マジテンション下がるわー」

集は言葉と共に態度にも現れて本当にこいつは分かり易い奴だなと思った。こんな所が憎めないよな。

「私も同じ転校生として楽しみだわ。」

「…オレは転校生ってもんにいい思い出ないから「なんか言った?」…なんも言ってません。」

こんなこと話してるが桐崎さんは誰が来るのか流石に分かってるよな。

「よーしお前ら突然だが今日は転校生を紹介するぞー。入って鶇さん」

「はい」

ああ、やっぱり鶫だ。
隣を見ると桐崎さんはかなり驚いている顔をしていた。
いや、何でだよ。

「はじめまして鶫　誠士郎と申します。どうぞよろしく。」

現れた鶫は男子のブレザーにキリッとしたイケメンフェイスな為男にしか見えなかった。
そして当然

「きゃあーーー!!どうしようすっごいイケメン〜!!」

「モデルさん!?」

「顔ちっちゃ～い!!」

女子が大盛り上がり。

男子はイケメンの登場に顔を歪め睨んでた。

このクラスの男子ガラ悪いなオイ。

「転校生って鵜だったの!?」

「お嬢ーーー昨日ぶりです!!」

驚き立ち上がる桐崎さんとその桐崎さんに向かって飛びつき抱きしめる鵜。

それを見て盛り上がるクラスメイト。

本当に話題につかないよな。このクラスは。

14話

クラスは一通り騒いで一旦はキョーコちゃん先生になだめられホームルームを始めるが全員がそわそわし出し話も上の空ホームルームが終わると一斉に全員が鵜に群がって行った。

しかし、鵜はすぐに桐崎さんの所に行き群衆に巻き込まれていた。

「しっかし、どうしてあんな格好してるんだろうな?」

「あいつの趣味なんじゃねぇかな?」

「いや2人とも何言ってんだ?今あいつが言ってただろ?制服がなかったんだってよ。」

俺と集の会話に楽は分かっていないようだった。

まぁ、楽が鵜を男だと勘違いしているのはわかるが集はどうして気づいたんだ?

「あーあーそう言う事。そりゃ仕方ないよな！仕方ない！」

「??んだよ気持ちわりーな。」

楽には黙っとくわけか、面白そうだし俺も言わないでおくか。

それからと言うもの、鵜はまるで執事のように桐崎さんをお世話していて俺から見ればそう見えるが、他からすると男女がいちゃついてるようで、それを見て回りはざわつく。

気づけば昼休み

「今日は屋上で食うか。…教室うるさいしな。」

流石に一挙一動で反応して大声は席が隣の身としては、耳が痛い。

うちの高校は珍しく屋上に出入りが可能な学校で、柵は決して高くない為あまり柵に

は近づかないようにとは言われているが、その近くに椅子が置いてあると言う謎の設置だ。

「食ったら眠くなってきた。」

俺は屋上扉の上で寝っ転がり晴天の太陽が心地よい暖かさを体に感じていた。

ガチャッ

どうやら誰かが来たようだ。しかし、眠い為頭が働かなかった。

「なんだよわざわざ場所まで変えて…」

「いえ…どうしても一つハッキリさせておきたい事があるんです。……お嬢の事を本気で愛していらっしゃいますか?」

話からするに楽と鵜だなこれは。

「バッ……ったりめぇよ」

ごもるなよ。

「どのくらい愛しているんですか？」

「そりゃもうとんでもなく愛してるよ…」

「本当に？」

「もちろん!!」

「お嬢のためなら死んだっていい？」

「おう！当然その覚悟だ…!!」

いや嘘つけ。

あんまり桐崎さん絡みの話は今はあんまり聞きたくないんだよな。そして思考をやめて少し仮眠をしようとした瞬間心地よい暖かさが一瞬にして無くなり体が冷えた。

「…そうですか安心しました。…では死んで下さい。」

その言葉と同時に俺も飛び起き楽に銃を突きつけようと動き出した鵜の腕を掴んだ。

「なっ!?…大谷様?」

「優!?…と…とりあえず助かったのか?」

「あっぶね～ギリギリセーフだな。」

俺は掴んだ腕を引き手に持っている拳銃から弾を抜いた。

「ハァ…どうせ銃はこれだけじゃないだろうが、こんな物騒な事は学校じゃやめてくれ

ないか？」

「し…しかしこれはお嬢に関わる事でーー」

「やめろっての！」ゴンッ

「ッ!?…痛い！」

まだぐちぐち言いそうな鵜に俺は頭突きをかまして手を離した。

こいつは幼い頃からずっと桐崎さんの為に捧げて来たものだから忠誠心は凄いからな。

「ハァ…そんなに納得がいかないなら放課後になんらかの勝負でもして白黒ハッキリさせろよ。」

「な!?…何言ってんだよ優！」

「それは名案だ！一条楽！貴様にお嬢を賭けて決闘を申し込む!!」

「まず本人に了承得てから賭けろよ。」

「わかった！聞いてくる！」

そう言って鵜は全速力で走って行った。

「イヤイヤ…マジで何してくれてんの優!!俺があいつに勝てるわけないだろ！」

「まぁ決闘で殴り合いとかだったら勝ち目は無いだろうが、それ以外で戦えばいいだろトランプとかさ。」

「イヤ万が一負けでもしたら街が火の海だぞ！」

「……まぁ頑張れ。」

「オイ!!」

結局その後、鵜からちゃんと了承を得たと話があり放課後に決闘が決まった。

まぁ放課後プール掃除の俺には関係ない事だが。

放課後

俺は担任のキョーコちゃん先生と屋外プールに来ていた。プールには水が張っていた。

「キョーコちゃん先生…マジで俺１人なの～」

「大丈夫大丈夫。掃除って言ってもプールサイドをブラシで磨くだけだからな。」

「いや、まぁまぁ広いからね？」

「じゃあ、後で見にくるからな～サボるなよ～」

そう言ってキョーコちゃん先生は、ブラシとバケツを俺に放り投げ去って言った。

「ハァ…これ普通事務のおじさんとかだろ。」

俺はぐちぐち言いながら手を動かしかつての修行僧時代の掃除を思い出しながら今行われているであろう決闘について考えていた。

たしかに、かなり無責任な事をしてしまったよな…後で飯でも奢るか。

そんな事を考えていると

ドドドンッドンッドドンッ!!

「銃声!?あいつらマジかよ!」

急に聞こえて来た銃声に俺は屋外プールの柵に顔をつけて校庭を見るとそこには生徒がたくさん集まっておりその中には楽と鵜の姿はなかった。

ガラッ

今度は校舎の方から聞こえて来てそこを見ると

「マジかよ。」

校舎三階の窓から飛び降りる二つの影…楽と鵜であった。

校舎の高さは３階だと地上からだと約７～８メートルほどそこから落下すれば運が良ければ骨折、最悪は死亡。

２人はそれを知ってるからかプールに向かって飛び降りているのだがそれでも死ぬ危険がある。

プール着水で勢いを殺したとしてもプールの底は深くても１．４メートル、スタート位置近くでは０．９メートルと浅い為３階から飛び降りて高校生男女の体格でも、勢いが殺される前に底に激突し打ち所が悪ければ脊髄が損傷してしまう。

俺は、急いで２人の落下予測をして勢いを無くすため２人に向かって跳躍し掴む、落下の力の方向を下から横に変えプールに着水をした。

ドボーンッ！

そして、水中で２人の様子を見ると楽は意識があるようではあったが鵜は完全に意識を無くしていた。

溺水での対処を思い出し俺はまずは鵜の脈拍を確かめると着水での衝撃がショックで止まっていた。

そこからの対処は水中での人工呼吸で俺は一度水上に顔を出して息を吸いまた潜り鵜の鼻つまみ口から呼吸を送る。

それを２回、３回と繰り返しようやく水上のプールサイドに引き上げた。

声をかけても未だに鵜の意識が戻らないためプールサイドにいた楽に。

「楽！今すぐに保健室に行って先生を呼んでこい！あと他の奴に頼んで１１９に電話!!それとタオルとＡＥＤを持ってこさせろ!!」

「え？…わ…わかった。」

「…急げよ！ここからは時間との勝負だ！」

楽を走らせ俺は鵜を仰向けにさせて胸骨圧迫を開始する。
胸骨圧迫は、腕をしっかりと伸ばして肩が横から見て垂直になるように、腕で押すのではなく体重をかけるように押し込み５センチくらい沈むように行う。
これを３０回行う。これは毎分１００回以上のテンポを維持して行うのが非常に重要である。
次には人工呼吸を２回。
この時頭を少し上に向けさせ気道を確保してから行わなければならない。

心肺蘇生法を行なっていると校庭にいた生徒達が集まって来ていた。

「っ!?鵜!!」

鵜の様子を見て１番に桐崎さんが走って来て涙を浮かべながら膝から崩れた。

「お…おい…あれやばいじゃねぇの？」

「せ…先生呼ばないと。」

生徒達はただならぬ状況に困惑して少しずつ騒ぎになっていった。

「鶫!!鶫ぃぃ!!」

桐崎さんの泣き声を隣で聞きながら俺は心肺蘇生法を続けた。

その甲斐があったか

「ガハッ…ゴホッゴホッ……ハァ…ハァ…あれ？ここは？……お嬢。それに大谷様。」

「つ…鶫いいいい!!」

鶫は意識を戻してそれを見た桐崎さんは鶫に抱きついた。

「ハァ～～終わった～」

俺も緊張の糸が切れたように横に倒れ込んだ。

今はまだ６月、濡れている服には寒い季節であった。

「優!!先生連れてきたぞ!!あとＡＥＤも……ってあれ大丈夫っぽい?」

「大丈夫っぽくても後は私の仕事だよ。」

やって来た楽は保健の先生をちゃんと連れて来ていた連れて来ていた。

「じゃあ、後はお願いしますよ先生。」

「ああ、君もよくやったよ。」

「あ…あの私まだここにいてもいいですか?」

「邪魔しなければ大丈夫だよ。」

俺は歩き出し楽が持って来ていたタオルで自分を包んだ。

「あ…あの大谷くん！」

後ろから桐崎さんに声をかけられそちらを向くと。

「鵜に代わって言うけどありがとう。」

「生きてれば何でもいいよ。」

「本当にありがとう」

桐崎さんの顔は涙でボロボロだがとても可愛く美しかった。

俺はそれを直視できずタオルで顔を隠し去ろうとしたら。

「あの優…俺からもありがとう。…俺じゃ何もできなかっーーー」

「歯くいしばれ…楽」

「へ？…ぐはっ!!」

謝って来た楽に俺は顔面に1発強めの拳を打ち込んだ。

「1発だけで勘弁してやるから…反省しろよ。」

「…本当に悪りぃ。」

それから俺と楽は何も言わずに俺はその場から去って今日持って来ていた体操着に着替えてその日を終えた。

次の日、クラス全員に反省文が渡され楽と鶇には1週間の謹慎が言い渡された。

15話

楽と鶫の決闘から数日経ったこの日。
俺は楽の家に来ていた。

1週間の謹慎を受けた2人はちゃんと家にいるようでしっかりと反省してる様子が通話アプリで伝わって来ていた。
そんな中まだ夏ではなく風が冷たい日にプールに飛び込んだせいか楽は風邪をひいたらしい。
まぁ、自業自得ではあるが原因としては俺のせいでもあるので、こうして見舞いに来たのだ。

ピンポーン

インターホンを鳴らした家は相変わらずの大豪邸でその凄さに毎度圧される。

「こんにちわ～一条楽君のお見舞いに来ました。」

「おお～前に来た坊ちゃんの友人ですかい。どうぞどうぞあがってくだせぇ。」

ドアから顔を出した強面ヤクザさんはその顔とは裏腹に優しく対応してくれた。

開けてもらった玄関を入ると女子物の靴が二足あった。

誰か来ているのか。

そう思った途端部屋の奥の方から声が聞こえてきた。

「ねぇねぇ、お粥って何入れればいいのかな？蝮とか？」

「私色々持って来たの。それ全部入れよっか。」

声の元は２人だがたった一言話していた内容である程度予想はついていた。

あの２人には本格的に料理を教えないとまずい気がした。

靴を揃え俺は声のする方へ向かい。

「全部入れちゃおっか。」

「栄養にも良いしね。美味しはずだよ。」

「んなわけねぇだろ。」

「!?大谷くん!?」

どうゆう思考回路でこの鍋の中のダークマターを美味しそうに見えるのだか。

「病人にいかにも胃に悪そうなものを食べさせて悪化させる気か。…ちゃんとレシピ通りに作って栄養のあるものを作るんだ。」

俺は、ダークマターと見た目綺麗なお粥を隣に置いてお粥を作ら始める。

まずは鍋に水を張りお米を入れ銀杏切りにした大根も入れ弱火でじっくりと煮込みます。味付けにだしの素や塩を入れしょっぱ過ぎないように味見する。

「まぁ…こんなもんだろ。」

「え？これだけ？…青汁は!?黒酢にレバーと納豆とひじきとか！」

「お味噌は！サプリは！栄養ドリンクは!?」

「初心者特有の隠し味を入れたがるやつだが、その材料はな～」

もうこの２人に台所は立たせてはいけないな。

とにかく、なんの問題もなくお粥を作りそれを楽の部屋に持っていく。

扉を開けた途端に楽は、涙ながらに礼を言いながらお粥を食べた。

おおよそ、２人の調理の腕前を知っていたからこその涙だろう。

しばらくすると楽は眠りにつき３人のうち１人が残ろうということになり、小野寺が潔く立候補し小野寺を残して俺と桐崎さんは帰り道につく。

正直、小野寺が残る事には思う所もあるが、ここで俺がわがままを言うのも違うと考えなんとか納得した。

そんな桐崎さんとの帰り道

「ねぇ、大谷くんちょっと私の家に寄ってかない？」

「へ？今から？」

突然のお誘いに驚くが桐崎さんのその目はまっすぐこちらを見ていた。

「鵜がねどうしても大谷くんにお礼を言いたいってここ最近ずっと言ってたから…どうかな？」

理由を聞いてちょっとがっかりだが最後の一言と首を少し曲げる動作があまりにも可愛いくて全てが吹き飛び

「ぜひ、行かせてもらいます。」

即答だった。

こうして俺は桐崎さんの家に2度目の訪問となった。

ーーーーーーーーーーーー

やはりでかい。

前も思ったが豪邸過ぎて周りとの違和感が半端無い。

「ほら、ボーっとしてないで行こ。」

「お、おう。」

桐崎は俺の手を掴み笑顔で引っ張る。

ヤベェ…スベスベで柔らかくて…とにかくやばいな。女の子の手は。

あれ？俺、こんな変態な感じだったか？

自分の新たな一面を発見しながらも、豪邸に入ると。

「お帰りなさい！お嬢!!」

「たっだいま〜」

「お…お邪魔します。」

強面の皆さんが玄関前に並んでいて、その光景もかなり迫力あり俺は圧された。

「鵜は、律儀にずっと部屋に居るから行きましょ。」

「いや、律儀だな本当に。」

自宅謹慎なんて学生にとっちゃ遊び放題で、すぐにでも外に繰り出すつーのに。

そして、広い廊下を歩き色々豪華な感じなのだが着いたところは、周りと一切雰囲気の違う扉があった。

「え?まさかだけど、ここ鵜の部屋なのか?」

「ううん…部屋は別にあるけど、確かクロードが言うには反省部屋なんだって。」

あの人が言う反省部屋ってなんか拷問部屋を思い浮かぶな。

「鶫～入るわよ～」

「お…嬢ぉぉぉぉぉぉ!!!」

部屋から飛び出でくる鶫を桐崎は抱きとめる。

涙目で鼻水を垂らす鶫は、そんな顔なのに可愛いく見えた。

やばい今日の俺はちょっと変態性が強いぞ。

「はいはい…頑張ったわね。あともう少しで学校に行けるんだから頑張って。」

「うううう…はい。頑張ります。」

そう言って桐崎は、鶫の頭を撫でてその鶫は撫でられて嬉しいようで小動物のような

笑みを浮かべる。

おいおいおい、今日は俺をキュン死にさせにきてるな。

こんな可愛い同級生が目の前でこんな状況を見させられて、俺は放置か？

「ほら、今日は鵜がお礼を言いたいって言ってた大谷君を連れてきたんだから。」

「へ？…あ…ああ。お…大谷様。」

「おう…久しぶり。…今回は悪かったな。あの決闘提案したの俺だし。」

「いい…いえいえ…そ…そそそんな、今回は私の不手際で起きた出来事でその上命まで救ってもらって。…本当にありがとうございました。」

そう言って鵜は桐崎から離れ俺の前に来て、頭を下げた。

しかし、気になるのは先程から目を合わせようとしないことだ。

「まぁ、無事で何よりだ。生きてさえいればいいさ。」

俺は、返事と同時に丁度いい高さにあったから鵜の頭を撫でる。

「っ!?……お…大谷様!?」

「お…おう、わりぃ丁度いい高さにあったからさ。…つい。」

「いっ…いえっ大丈夫です。……むしろ、よかった。」

「ん?…そうか。」

「……」

後半の方は小声で何を言っているか分からなかったが大丈夫そうだ。

一瞬本気で焦ったがな。

…そりゃ、同学年の男子に突然頭撫でられてみろ。イケメン以外許されないからな〜

その後、桐崎さん家で夕飯をご馳走になり、半端ない豪華な料理に幸せな気分だった。

１６話

問題を起こした２人の謹慎が解けたこの頃。
次のイベントが始まろうとしていた。

いつも通りの教室は今度の週末にある林間学校の話題で盛り上がっていた。
誰と班を組むやら、男子は誰を班に入れたいとか女子も誰がいいとやら色々なところから聴こえてくる。
俺自身としては、別にどこでも良かった。でも、強いて挙げるとしたら桐崎さんが１番に頭に浮かび上がった。まだ、心では引きずるところもあるが、もう俺の本能がそう考えるのだから自覚したのだ。

「優は誰と組みたいのかな～」

「うおっ…びっくりしたー、なんだ集かよ。」

「おおう…友人に対してなんだとは凹むぜ。それよりもさ、誰と組みたいんだ？優さんはよ～、言ってくれれば手伝うぜ～」

一挙一動が早く話しかけてくる集。

ここは、なんとか言っておかないと終わらないなと思い。

「お前と楽の班に入れば自動的に美人が揃うからハブくなよ。」

「おお～わかってるではないか～ハブいたりしないから安心しとけ。…しっかし、またはぐらかされたな～。」

「教えるかっつーの。」

そんな、朝の何気ない会話を俺は楽しんだ。

その後、朝のホームルームで班決めが行われて無事に楽と集と同じ班になり、さらに小野寺と宮本、寝ている桐崎さん、そして鵜が同じ班となった。

正直、林間学校が楽しみで仕方なかった。

鶫ｓｉｄｅ

最近、謎の症状が私の体を苦しめている。

それは、とある人物を思い浮かべると胸が苦しくなってしまうのだ。ならば、その人物を思い浮かべなければいいじゃないかと思ったが、そう思ってもふと気づけば彼を目で追っていた。

最初の出会いは、思い出すだけで顔から火が出そうになるような出来事だった。知らなかったとは言え全力で腹に向かって拳を打ち込んでしまったからな。

それでも、彼は何事もなかったかのように私に接してくれる。

私は気絶してあまり記憶になく後で知らされた事だが、彼は私の命の恩人でもある。不思議な事にあの時、誰かに優しく包まれている感覚があってとても心地よかった。

そして、何より自宅謹慎の一週間の間、彼と一度も会えない事がさらに私を苦しめていた。それこそ、反省部屋の罰よりもだ。

そして彼が訪ねてきた時、それはもう苦しかったが、心地の良い苦しさだった。

この症状をクロード様やクラスメイト、担任教師や嫌々だが彼の友人達の舞子集や一条楽にも聞いたが曖昧な答えばかりで確信をついた答えではなかった。

「……鵜さん、それって…」

「何か知っているのですか!?小野寺様!」

「お…小野寺様って…小咲でいいよ。…えーとそれは多分…

鵜さんは恋をなされてるのではないでしょうか。」

「……はい?」

小野寺様の言葉に私の頭は真っ白になった。

来い、鯉、濃い、故意……恋。

頭に巡るのは、恋という文字で恋の意味は異性に対して愛情を持つこと。

つまり、私は彼を異性として見ていて愛情を持っている。

「……／／／」ボンッ

「つ…鶫さん!?」

一瞬にして顔が赤く熱くなり思考が停止した。
はたして、林間学校はどう彼と接すればいいのか分からなかった。

桐崎ｓｉｄｅ

ここ最近、鶫は上の空である事が多い。
何か悩みでもあるのか、聞いてみても顔を赤くしながら慌てるも教えてはくれなかった。おかげで、悶々とした気持ちになり気になり夜もなかなか寝つけなかった。
でも、その原因はすぐに分かった。
鶫は気づいていないだろうが、彼をよく見ていたのを私は気づいてしまった。
彼は、私の友達だ。それ以上でも以下でもない。

その筈なのだが、私はとても胸が締め付けられた気がした。
何故なのだろう、鶫がそう言った感情を持つことは喜ばしいことの筈だが。
なぜ、私は胸が締め付けられるほど苦しいのだろう。
私は、不安なこの気持ちを持ったまま林間学校に望む。

１７話

林間学校行きのバスの中

「……」ぶっす～

「いや～悪かったって優さんよ～、そろそろ機嫌直してくださいよ～」

「べっつに～機嫌悪くねーし」

林間学校が始まり班も自分としてはかなりいい所に入れたと思い浮かれていたものの、今現在のバスの席に不貞腐れていた。

班は、俺に楽、集、鵜に宮本、小野寺に桐崎と俺にとっては最高の班に入れたと考えていたが。

今現在、自分の席には隣の集しかおらず、残りはもうひとつのバスに楽を中心に１番広い後ろの席に腰を下ろしていた。

俺を含めたクラスの男子全員が、楽に恨めしい顔を向けていた。

自分の感情を自覚してるからこそ、本気で不貞腐れて隣で目を光らせておちゃらけた友人を対象にふつふつと怒りが湧いていた。

「まぁまぁ…てか、不貞腐れるって事はあの中に優さんの本命がぁぁぁぁぁぁ!!すんません調子に乗りましたからアイアンクローやめて!!」

「……」ギリギリ

「ちょ！いつもならすぐ終わるのに!!無言でスルーやめて!!!」

隣でなにか騒いでいるが放っておいて、別のヤツと話そうとこのバスを見渡すと見知った3人組が見えた。

「おい、席狭いからもっとそっちに寄れよ。」

「は…はいいいいい／／／」

キザイケメンの小木良太が、２人席のバスで窓側女子に向かって迫り狭いスペースで壁ドンをしていた。

「ふふふ……なかなか揺れるイスね。まったくもって使えないわ。」

「は…はいいいいぃ！」

モデル顔負け美女の中林優香は、わざわざ席のない真ん中に男子生徒を配置して背中に乗っていた。

「ふふっ……僕の上に座るかい？」

「え？……あっ…はい。」

「最高だ!!」

女子のクラスメイトを自分の背中に乗せて喜ぶ大森巧。

「……寝るか。」

忘れよう、今見たもの全てを。

「あのそろそろ離してもらってもいいですか!?……って寝てる!?」

目的地到着

「どおーだった!?俺が用意したスバラスィードライブは?」

「プラスかマイナスかどっちかと言えばプラスだが、お前を……どうしたんだその顔。」

息が切れ切れな楽は、原因に対して文句を言おうとしたが顔が多少凹んだ友人を見て疑問に思った。

「起きたらなんかそうなってたぞ。」

原因でもある俺は、知らん顔をしてその会話に入り込んだ。

楽は俺の言い方からして察してはいるが特に何も言ってこなかった。

「よーし　みんなよく聞けよー!プリントにも書いてあるけど、お前らは今から近くのキャンプ場で飯盒炊さんとカレー作りだ。楽しんで作れよー!」

「あーーーい」

キョーコちゃん先生の話のあとそれぞれの班がカレー作りを始めた。

「さてさて、ここで俺が参加するとみんなで作る意味なくなるので監修させてもらいます。それでは、役割分担させてもらいます。」

「「「はーい」」」

「はい、いい返事。楽は薪を貰って来てもらって火を起こしてください。火には十分に気をつけるように。」

「了解だ。……役割分担…頼んだぞ。」

楽が最後の方を小さい声で言ってくるのは、凡そ小野寺と桐崎の壊滅的な料理の腕前からであろう。

「安心しろ、そんなヘマはしねぇよ。」

今回、楽の期待を裏切るだろうが俺は大丈夫だと確信していた。

「集は、米とぎ。小野寺と宮本は、鍋と食器を貰ってきてくれ。桐崎と鵜は、野菜と肉を貰ってきてくれ。料理器具とかカレーのルウは俺が持ってくるから。」

「「「はーい」」」

それぞれが、動き出し自分の持ち場へと着いた。

俺も自分の仕事で器具を貰ってきて、それぞれの役割を見回っていた。

最初に訪れたのは楽の場所で、こいつは普段から料理をしているから今回は作らせないように、火の扱いを任せたのだ。

「なぁ、優…本当に大丈夫なのか？お前も前に見ただろ？あの二人の腕前をさ。」

「知ってるよ。でも今回は大丈夫だ、安心しろって」

「うーん、しかしだな～」

「おいおい、お二人さんなんの話しをしてるんだ？」

米とぎの役割の集が、といだ米を持ってきて会話に入ってくる。

「楽が女子チームが作る料理にケチつけようとしてるんだよ。」

「なぁぁぁにいいい、楽さんよーそれはいけませんぞー」

「や…やめんか、変な誤解が生まれるだろ！」

俺の悪ノリに集は乗り楽をからかった。

たまには、男子３人でこんな何気ない雑談が楽しかった。

次に訪れたのは女子チームのカレーのルウ作り班だった。

ここには、変な材料が無いため余計なものを入れられる心配は無いのだが、一応は様子を見に来た。

そこでは、綺麗なタマネギの皮むきを見せる小野寺と物凄い早業でピューラーを扱い見事な皮むきを見せる鵜。

そして、その野菜をしっかりと切る宮本。震える手でゆっくりと野菜を切る桐崎だった。

ここでは、それぞれが自分に合った役割を与えた。

まぁ、桐崎は最近よく料理部に来て中林と一緒に料理の練習している姿を見ているため、今回は日頃の成果の為に役割を与えたのだ。

そうして、順調に料理が進みカレーが完成した。

「うん、匂いもいい匂いだし色もしっかりしてるから、これで出来上がりだ。」

「もはや、奇跡だな」

「いや～女子と一緒に作った料理なんてサイコーだな～」

男性陣はそれぞれの反応に対して。

「疲れたわ。小咲があんなの入れようとしビックリしたわ。」

「ご…ごめんね、るりちゃん」

小野寺の暴走を常に気を張っていた宮本が肩で息をしていた。

「いやぁー料理って楽しいですね！お嬢！」

「うん、今回は上手くいったわ。」

本当に楽しんでいた鶫と桐崎。

「練習した甲斐があったな。」

「うんっ！」

桐崎のその笑顔がとても明るく可愛いものだった。

１８話

昼のカレーをみんなで味わい、一同は今日泊まる旅館へと足を運ぶ。

「おおー…広いな」

「こうゆう所はうちの学校、豪華だよな」

かなり広さのある大部屋の和室だ。襖を挟んでいるとはいえ、男女同じ部屋で寝るなんて頭おかしいんじゃないだろうか。と学校の考えに頭を働かせていると

「さてと、男子３人は廊下かベランダどっちで寝るの？」

「俺らは部屋で寝ちゃダメなの!?」

「あなたに信用があるとでも？」

しれっと集に向かい毒を吐く宮本。
流石に冗談だろうが。……冗談だよな？
その後、全員でトランプのババ抜きをやるが集合時間をとうに過ぎて見に来たキョーコちゃん先生に怒られ決着をつけられずに終わった。
その夜、夕食をたらふく食べて食休みにロビーの椅子に座っていると

「ん？…何してんだ、楽」

「優か…いや、先生にロビーから電話来てるって話を聞いたんだけど…誰からも来てないって言われて」

「新手のイジメじゃね？」

「そんなわけないだろ……っと、そろそろ風呂に行かないと」

「ちょっと待ってろ俺も行くよ」

多少休んだ事で腹も大分いい感じになったため重い腰を持ち上げる。
楽と話しながら廊下を歩きそのまま男と書かれたのれんをくぐり脱衣所に入る。

「楽…お前体細いな…白いし……しっかりと飯食えよ」

「仕方ねぇだろ…運動部に所属してるわけじゃ無いし、運動とは縁がないんだよ…だいたいそっちだって運動部ってわけじゃ無いのになんでそんなものすごい筋肉と傷が付くんだよ。運動部だってそんな傷つかない。」

「前に言っただろ……これは山籠りして食料現地調達とかしてると自然とこうなるんだよ。今度楽も来いよ」

「1日ともつ気がしねぇからパス」

そんな会話をしながら、服を畳みタオルを持ち温泉の扉を開ける。
そこには、台座とシャワーがいくつもありその奥に大きな温泉があった。

「掛け湯をしっかりとしろよ。楽」

「わかってるよ。優こそ、温泉に入る前にシャワーで一度頭を流せよな」

掛け湯は、心臓に遠い手や足にかけてそのままゆっくりと心臓に近づくようにかけます。これは脳卒中や心臓発作を起こさないために体を温泉の刺激に慣れさせる意味があります。

そして、シャワーで髪を流すと約7割ほどの髪についたゴミが流れるためとりあえず流してから温泉に入りましょう。

「さて、シャワーも掛け湯も済ましたし温泉入ろうぜ……ってなにやってんだ?優。」

「温泉に来たら温泉まで滑ってからの飛び込みに決まってるだろ。」

絶対に真似をしないようにマナー良く温泉に入りましょう。

「誰もいないからってそんな好き勝手に「行くぞ！」いや、待て！」

俺は、スライディングの要領で水面の水を滑る。

すごい速度だが温泉の縁石が近づき、手で地面を叩き上体を起こし両足を合わして地面を強く蹴り空中で体を丸めて一回転しあぐらの体制で着水する。

とてつもなくお尻に激痛が走るが、着水時の水しぶきの威力を見て痛みなど忘れた。

「いや、すごいけども！次は絶対にやるなよ!!」

楽の声も気にせず温泉を俺は満喫した。

そして、ゆっくりと楽が温泉に入ってきた。

「あん時殴って悪かったな。」

「なんだよ急に…」

「決闘を提案しといて放置して…その上殴るって中々やばい奴だな。って思って。」

「自覚はあったんだな。」

ゆっくりと温泉に浸かると過去を振り返るようになる。結構最近だが、思い返せばまだ半年も経っていない。

「つか、他のやつも遅いな。…早くしないと時間終わっちまうのに。」

「ここ…実は女湯だったりしてな。」

「そんなわけ「うわぁー広ーい！」…へ？」

楽の言葉を遮るように聞こえる聞いたことのある高い声。

湯気の陰から見える見たことのあるモデル体型のシルエット。

温泉だから当たり前だが、一糸纏わぬ姿の彼女ーー桐崎千棘が現れた。

「……」

「……」

「……」

「キャアアアアー」「「ギャアアアアアー」」

一通りお互いを見てから一瞬間をおいて叫ぶ。

その声に恐怖や驚き羞恥など様々な感情が入り混じっていた。

「こんのもやしぃぃ!!死に去らせぇぇ!!」

桐崎の動き出しは早かった。

叫んだ後にすぐ拳を握りしめて片手でタオルを持ち体を隠しながらも素早い動きで楽の懐に入り下から一気に拳を楽の顎にめり込ませ綺麗な昇竜拳を打つ。

その衝撃で楽はゲームキャラのように空を飛び柵を越えてとなりの温泉へと飛んで行った。

「…ハッ!?…お…大谷くん!あ…ああなたも早く出て行きなさーー」

桐崎は怒涛に言葉を繰り出すが、何かに気づいたように固まった。

「ご…ごめん、今すぐ出るから」

「……っ!…待って」

素早くこの場から去ろうとしたのだが、桐崎に腕を掴まれ止まった。

正直、俺は先ほどのこともあって俺も先ほどの楽のように昇竜拳の餌食になるかと体がこわばった。

「あ…いや…その…よく考えてみれば…これ、大谷くんのせいじゃ無いっぽいって感じで……思い当たる節があったりなかったり。」

「え?…なにそれ。…っ!?…桐崎…前隠せ!」

「あっ！……ありがとう……そ…それで、その…うちのクロードっていうお目付け役の彼がさっきフロント近くに居て、多分だけど私ともやーダーリンの事を不審に思ってその作戦に嵌められたんだと思うの。」

「クロード……ああ、あのメガネの人か。」

「うん…本当にごめんなさい。」

しゅんとした桐崎だが、ここに長居するのは良く無いため柵にある隣の温泉に移るドアがありそこに向かうことにした。

「事故とはいえ悪かったな桐崎さん。とりあえず俺は、ここに長居は出来ないからあのドアから出て行くことにするよ。」

「うん、そうね。…それじゃあまた「おー桐崎、もう入ってたのか。」…へ？」

桐崎の声が遮られた瞬間、俺は瞬きも許されないこの状況で一瞬にして気配を完全に消しそして、しっかりと息を吸い込み温泉に潜った。

もたもたしていたことが、ここに来て仇となったのだ。

ここは、女子風呂でさらに時間がズレて後からとはいえ遅くなった事から他の人が入ってくるのは当たり前である。

しかし、入ってきたメンツがまずい。

「お嬢！遅れました。」

「なかなか広い場所ね。」

「ちょっとるりちゃん置いてかないでよ～」

我らがクラスメイト女子全員と担任だ。

もしも、見つかることになれば良くて退学、悪くて犯罪者だ。

「……!?……うんお風呂が楽しみでね！」

桐崎は素早くその場で湯船に浸かり俺の体を隠すように座ってくれた。
次々と入ってくる女子、このまま時間が過ぎれば過ぎるほど俺の脱出確率が下がってしまう。
正直、先程のドアだがすでにもう使えない。
要因としては、まず俺がこの湯から出て一瞬にして向かいそして鍵がかかっているかもわからないドアを開けて逃げるなどほぼ運ゲーで、賭けるほどの価値はない。
何よりも凄腕のヒットマンがいる鵜も厄介である。
現在気配を消しているが、不用意に動くと彼女のセンサーに引っかかる。
よって、先ほど潜った時に見つけた隣の湯と繋がっている穴、その穴からの脱出を試みようと思う。
「……桐崎さん、あっちの方に隣の湯と繋がってる穴を見つけた。だから、みんなの気を引いてくれ。」ボソボソ
「…わかったわ。」ボソボソ

小さな声で話し合って、桐崎は指示通り動き出していた。
最中だからあまり声も聞こえて来ないが遠く温泉の入り口あたりで大きな声で話し合っているのがわかった。
潜水で穴まであと少しというところまで来て多少安堵して向かったが。
そうは問屋が卸さないと言わんばかりにアクシデントは起きた。

「もー！いないったらいないってば～!!」

（嘘だろ!!おおおお…小野寺～～!!）

穴の前に突然現れた小野寺（裸）に驚きながらも目の前の逃げ道を塞がれたことに戸惑り口から多少の空気が出て行った。

「……？ここに黒い何かが…」

（マズい!!バレる！）

とうとう人生が終わる瞬間が訪れるとそう思って諦めかけていたその時。

「お…小野寺さん！私とあっちで話しましょ!!」

救世主のように突如として現れた桐崎は小野寺を連れて他へと移動して行った。

そして、ようやく温泉の穴に到着して俺はようやく脱出した。

正直体がつっかえたりしたら死ぬかもしれない危険性があったが余裕で通り抜けて隣の男子風呂に到着した。

「ぶっは!!」

「うおっ！びっくりした!!…何やってんだ？優。」

「潜水。」

そうして俺は風呂から上がり更衣室に置いてある浴衣に着替えてさっさと上がった。

温泉に犬神家の死体のようになっていた楽は放置した。

千棘ｓｉｄｅ

無事大谷くんを脱出させる事が出来て一安心した私はようやく落ち着けると思いゆっくりと温泉に浸かった。

そんな私にふと隣にいる小野寺さんが話しかけてきた。

「桐崎さんって大谷くんと仲良いよね。」

「ブッ！……ま…まぁ、友達としてね！」

「料理も教えてもらってたんだよね？」

「うん…部活の方で楽しく教えてもらってて、作り終わった時に自分で食べるだけじゃ無くて誰かに食べてもらう事を1番に考えながら料理すると、自然とやる気が出てくるの。」

まぁ、レシピ通りやれば失敗する事なかったんだけどね。

「あれ？このタオル誰のだろう。」

近くにいたクラスメイトの女の子が温泉の岩場にかかっていたタオルを持ち上げていた。

そして、皆んなは気づいていないけれど、私の視界に移ってしまったそれを見てすぐさまタオルを取りに行動していた。

「ご…ごめんね～それ私のなの～…ほら、温泉にタオルを入れちゃダメって言うからね。」

「そっか～桐崎さんのだったんだ～」

彼女はタオルを畳んで私に渡してくれた。

もう一度確認すると、タオルのタグに油性で書かれたＹ．Ｏと書かれたイニシャル

だ。このクラスには、そのイニシャルに当てはまるのは1人だけだった。

しばらくして、温泉から上がり浴衣に着替えいる最中。

ふと、タオルに目がいった。

何の変哲も無いタオルで、あとで返さなきゃいけないと思いながらもタオルを持ってみた。

なによりも、彼には謝らないといけない。私の家の人の問題で彼を巻き込み危うく犯罪者にさせてしまう所であった。

持っていたタオルを見ているとゆっくりと顔を近づけて顔を埋めていた。

ゆっくりと吸い込むと温泉の匂いがしていた。

「……はっ!?」

勢いよくタオルを投げて私はいったい何をしていたのだ？

顔から火が出そうなくらい恥ずかしいと感じてすぐさま周りを見て誰が見ていないか確認をした。

幸い誰も見ておらず安心してすぐに着替えて出た。

「はぁ…顔をまともに見れそうに無いな。」

そう思いながらも部屋に戻る私だった。

しかしタオルの匂いを嗅いだ時、嫌とは思わなかった。

19話

「……」

「……」

気まずいな、さっきまで温泉で何も纏わない姿だったからな。

互いが目を合わせずしていると桐崎が手持ちのバックからタオルを取り出して前に突き出した。

「これ……忘れ物」

「…あ…ああ、ごめん。」

「……それと、ごめんなさい。私の家の人のせいで危うく犯罪者に。」

桐崎は頭を下げて、俺に謝る。
まぁ、互いに無事だったし気にしていないのだが、桐崎は気にするだろう。
「……一応理解はしておくけど、ちゃんと言っといてくれ。流石に今回のは洒落にならないから。」
「うん…きっちりと言っとく。」
「……」
「……」
そこからまた言葉は無くなり静かになった。
「「戻ろっか」」
２人の言葉は重なりそれ以上は語らず。

しかし、頭の中では先ほどの光景を思い返すなど悶々としながら2人は歩く。
その後部屋に戻ってから集と楽が何故かベランダに吊るされていたけれど。特に気にせず布団に入った。

千棘ｓｉｄｅ

暗い森の中。
私は手を引かれて歩き続ける。普段なら暗い所だと私の足は一歩も動かないはずだった。
でも、前を見ると…彼の顔を見ると不思議と力が湧いてくる。
握る掌は暖かくとても安心して不思議と力が湧いてくる。
そして顔が熱くて心臓の鼓動も早くなっていた。

「どこまで行くの？」

先の見えない道に私は彼に問いかける。

「もう少しだよ。君は必ず気にいるよ。」

彼の答えは説明になっていなかった。けれど、不思議と納得した。
歩き続け森の出口を見つけ少しずつ明るくなる。
そして着いた先にあるのは

「すごい…綺麗。」

その景色は邪魔する人工物は一つも無くただただ広がる満天の星空。
私はその景色に魅了されて歩き出すと。

「危ないよ」

彼はそう言うと私を後ろから抱きしめる。

体全体に広がる彼の暖かさ。
しかし、足元を見ると底の見えない崖だった。
目をギョッとさせ底を見ようとすると後ろの彼が私を向かい合わせにした。
月明かりで明るいはずなのに彼の顔が暗くて見えなかった。
けれど、私は彼を知っている。彼以外のはずがないと確信していた。
互いに見つめ合って彼はゆっくりと顔を近づけてきた。
このシチュエーションでこの行動。
どんなに鈍感な人でも何をするかはわかるはずで、私もそれを受け入れ目を閉じて顔を近づける。
しかし、いつまで経っても何の感触がなく目を見開いた。
目の前にいたのは。

私の顔を必死で抑えて顔を真っ赤にした小咲ちゃんだった。
次の瞬間に崖が崩れて私は自然落下する。
地面にぶつかった瞬間に私は身体を大きくビクつかせ目が覚めた。
そして朝から私は小咲ちゃんへ土下座した。

優ｓｉｄｅ

早朝から同学年の同級生は今夜のイベントに話は持ちきりだった。

「なぁ～頼むよ～。」

「指定した紙を持ってくるだけだからさ～」

朝から野郎どもが俺の席に集まり暑苦しかった。

こいつらの要望は今夜の肝試しのくじ引きの不正だった。

実は俺は今回の肝試しイベントの統括管理を任されていた。そのトップである俺にすがりつき可愛い子と一緒になりたいという願望の強い野郎どもに頼まれていたのだ。

「だから、何度言われようが無理って言ってんだろ。そもそも、女子もくじ引きを同時にやるんだから結局運任せだろ。」

俺の言葉にブーブー言う奴ら朝からめんどくさいことに巻き込まれてうんざりしてた。

まぁ、裏取引をさせないために俺が選ばれたのだからその仕事は全うしようと思う。

群がる男どもを避け食器を片すと先ほど2回目のモーニングセットを頼んでいた大食いの女子。桐崎千刺が食器を片していた。

「「あっ」」

二人の目が合い2人はすぐに昨晩の温泉でのことを思い出す。

千棘に至っては今朝の夢もあって余計に恥ずかしかった。

2人揃って顔を赤くして互いに視線を晒す。

「お…おはよう桐崎さん。」

「お…おはようございます。」

「「……」」

互いに沈黙が続き

「そっ…それじゃまた後で」

言葉が重なりそそくさと互いに歩き出す。
その日の夜になるまで２人は互いのことしか考えられなかった。
特に千棘に至っては今朝の夢もあって余計に悶々としていた。

その日の夜
肝試し当日

林間学校の学生の一大イベントと言ってもいい肝試し。
生徒の自主性を尊重しているため教師どもは酒盛りを始めていた。
そんな中で俺は統括管理として最終確認を行なっていた。

「幽霊役の体調は？」

「先程熱を測らせ体調管理シートを書かせ確認したところ異常ありませんでした。さらに、各員に一本ずつ飲料水を持たせました。」

「よし！あとは場所の最終確認とトランシーバーの所持確認。カメラ隊のカメラチェックだな。」

お化け役のリーダー、カメラ隊のリーダー、誘導隊リーダーの3人と最終確認を行い予定通り順調に事を進めていた。

その中で誘導隊リーダーは一足早く出て行きペアの割り振りくじ引きを始めさせその間に幽霊役とカメラ隊を配置につかせた。

予定通りに事を進めて予定通りに終わらせるのが今回の目標だ。

そしてそれを可能とするためしっかりと確認を

「ごめん、ライトの電池切れた～」

しっかりとした準備を

「ごめーん、体調悪くて代わりの人に代わってもらっちゃった～」

しっかりとした

「ねぇ地図無くしたんだけど知ってる人いない？」

もういっか（ヤケクソ）

俺は全係に開始の合図を出してくじ引き会場に向かう。

そこでは、様々なペアに一喜一憂している姿が見える。

何故か鵜が男子側となって宮本とペアを組んで涙を流していた。

ここで目立っていたのは、楽と小野寺ペアだった。

「楽の奴、何でこんなにも強運を持ってるんだよ。」

正直すごく嫉妬するが統括である俺は頭を振って自分の仕事に集中しよと思った。

そういえばさっき幽霊役が変わったって言ってたな、誰とどこで変わったか確認しな

いと。
そう思って俺は体調を崩した生徒のところまで足を運んだ。
「え？誰と変わったって？桐崎さんだけど。」
「嘘でしょ。」
よりにもよって暗いところが大の苦手な人に何でそうピンポイントで変わるのかな。
すぐさまトランシーバーで交信を取るべく連絡を入れるが他の幽霊役は返事があるのに桐崎さんだけは返事がなかったのだ。
もしや電池切れなのか？可能性を視野に入れて他の幽霊役にはそれぞれ仕事に全うしてもらうとして今現在動けるメンバーはこの中では俺だけだった。

２０話

桐崎さんがおばけ役の代役をやる事に多分だが焦っているのは俺だけだろう。
みんなの普段見る桐崎さんは成績優秀で運動神経抜群で顔もいい天は彼女に二物を与えるどころか三物与える完璧美少女だと思われているだろう。
だからこそ、彼女が暗いところを怖がるなんて誰も思いもしないだろう。

「各リーダー！俺は一旦この場から離れるからみんなは普段通りに行うように見ていてくれ。」

「？何だ大谷、なんか問題でも発生したか？」

「急ぎの用が出来ちまった。まぁ、多少なり見逃してくれ。」

「……おお！そうかそうか！……いいぜ、準備の時には随分と助けられたから今日くらいはしっかり羽を伸ばせよ！」

「わり…ちょっと行ってくるわ。」

そう言って俺はインカムを外して無線機と電気の付く懐中電灯を持ちその場から離れる。

桐崎さんのペアは確か集だったはずだから、まずはそちらに向かうとしよう。

本部から出て肝試しの順番待ちをしている所へ足を運ぶと集の姿を探す。

案の定いつものメンバーが集まっていたところに集や楽の姿を発見したためすぐに向かった。

「集！」

「優！ちょうど良かった！桐崎さんがいなくなっちゃって…」

「ああ、その事についてこっちも聞いてる。どうやら体調を崩したおばけ役の子が近くにいた桐崎さんと交代したらしい。」

「じゃあ場所は分かって？」

「統括リーダーを舐めるなよ…地図からお化けの配置まで全部記憶してるからな。…だから、そこでソワソワしてる一条楽くんは突っ走らないようにね。」

俺は視界の端にソワソワしてる楽に声をかける。

本人は多分、桐崎さんが暗いところが苦手だって事は教えられてないだろうけど楽は人の為なら自分を省みない所があるから、そこはしっかりと釘を刺さないといけない。

「で…でも、ハニー1人じゃ心配で…」

「そんな慌てて暗闇の中の森に突っ込んで怪我でもされたら目も当てられない。…その優しさはいい事だが、自分のことも大切にしろ。…第一に、そんな非常事態に対して動く為に俺たちがいるんだ、だから少しは俺を信用しろ。」

俺の説得にとりあえず楽は肩の力を抜いて、俺の肩に手を置く。

「ハニーのこと頼んだぞ。」

「任せとけ」

その言葉を残すと俺は森へと走り飛び上がり木々を飛び越える。

「ナ〇トか奴は……」

集はその姿を見てそうツッコむと周りもうんうんと頷いた。

桐崎ｓｉｄｅ

おはげの代役を断る間もなく引き受けてしまい、私は現在絶賛真っ暗な森の中で１人です。

受け取った懐中電灯は電池切れ、場所を伝える為の無線機も使い方わからないしボタン押しても反応しないから多分充電切れ。

だから、トラウマを呼び起こすには十分だった。

「……ふぅ…はっ…はっ」

呼吸が速くなる。赤い血に縛られた手首に麻袋で隠された視界。
これら全てがこの暗闇の中で私の記憶が呼び起こす。
実際、私はあの後も家で寝るときは電気を付けるか鵜と一緒に寝てもらっている。
だから、最近寝不足が多いのだ。
だから、さっきからずっと周りに居ないはずの幻覚や幻聴が私を呼んでいるのだ。
目や耳を塞いでも聞こえてくる人の声に私は必死に我慢した。

「……うぅ…もう…いや……。」

私の頬にゆっくりと雫が滴る。

「…誰でもいいから……誰かたすけて」

その時だった。

「……あー、助けに来たぞ？」

ふわりと頭に触れるその手に私は覚えがあった。

死を覚悟したその時に震えていたけど優しく包み込むように、私に触れてくれた。

大谷優はまた私の元に来てくれた。

２１話

森の中を駆け回る必要はなく、桐崎さんの居場所は大体予想はついていた。
彼女は暗い所が苦手なので、まず動き回る事はないため交代した場所から動いてはいないだろう。
そうなると今は急いでその場に向かい所在を確かめないといけない。
一応発見した際にはペアである集に渡した無線機で連絡する手筈となっている。

「まずは見つける事だな。」

木々を渡り進むが、内心焦ってもいたのだ。
彼女はほんの少し前に薄暗いところで死の恐怖を味わっていたのだ、時間が経ったとはいえ忘れられるわけがない。
１０数年しか生きていないただの女の子なのだから。

「うおっと！」

そんな事を考えていたら手の力を緩めてしまい、木の枝から手を離してしまいその勢いのまま地面に落下して草むらに突っ込んだ。

ガサッ

幸い怪我は無くゆっくりと立ち上がる。

震える手は、思っていたより疲労していた。

自分の事も忘れるほど彼女のことを考えていたのだ。

自覚はしている、あの時から彼女の事が気になっていたのだ。

だけど、目を逸らし続けた。彼女の置かれている状況を知っているから、だからどうすればいいかわからなかった。

落ち込む俺は歩き出すと小さな声が聞こえた。

「うう…もういや…誰でもいいから…誰かたすけて。」

その声がきこえた瞬間、俺は駆け出し何も考えていなかった。

ただ、彼女のそばに居たいとそれだけを強く願っていた。

泣き崩れる彼女の前に膝をついて震えている手を彼女の頭にゆっくりと乗せる。
ここで気の利いたセリフを言いたかったが思い付かなかった。

「あー助けに来たぞ？」

苦手な作り笑いをして彼女の前に現れる。

桐崎ｓｉｄｅ

目の前の不器用な笑みをする男の子に私の心臓は飛び跳ねるように大きく動いた。
そして同時に、さっきまで動かなかった足が動き出して私は彼に飛びついた。

「大谷くん！」

嬉しさかなんだかわからない感情が溢れ出す。
彼に抱きついてそのしっかりとした肉体に温かい体温を感じると私の感情は爆発していた。

「きききき…桐崎さん!?」

驚く彼だが、私はそれ以上に強く彼を抱きしめる。

「き…桐崎さん……」

彼に抱きついた事を後で思い出して絶対に恥ずかしさで悶えるだろうが今はこうしていたい。

彼が来てくれた事が嬉しくて力が強くなっていくのを感じる。それだけ嬉しかったのだと自分でもわかる。

「き…きり…さ…き…さーー」

そして、あまりに強過ぎた力が彼にとどめを刺していたことにもようやく気づいた。

「お…大谷くーーん!!」

助けに来てくれた彼はそのまま力無く倒れた。

私自ら絞め落とした相手を現在担いで森の中を歩く。

彼の持っていた地図を読んだが今どこにいるのか分からないためとりあえず移動を試みているのだ。

「ど…どこに行っても木ばっかり！ほ…本格的に遭難!?」

流石の私もここまで自分が方向音痴なのか本格的に悩み始める。

ちなみに千棘は、奇跡的な動きにより絶妙にルートから外れており隠れているお化け役とも遭遇することもなかった。

それゆえに末に到着したところは――

「うわ……すっごい綺麗。」

そこは都会から離れていて空気が澄んでいるため満点の星空が目の前に広がってい

た。
偶然にも到着したこの場所は、肝試しルートから少し離れた公園で時間帯的に人がいない時間帯だった。
近くにあるベンチに彼を座らせて私はゆっくりと散歩する。
「……確かに暗いのもたまには良いかもね。」
歩き終わった私は、彼の横に座る。
気を失った彼はゆっくりと寝息をたてていて起きる様子はない。
だから、私はゆっくりと彼の方へと寄りかかる。
すごく勇気を振り絞った。
彼の鼓動を聞いて私は確信した。
「……そっか、好きなんだこの人の事。」
そして同時にこの恋は叶わぬものだとも思った。
彼は一条楽との偽物の恋人である事は知っている。
前に泊まりに来た時に話してくれたから。
だけど、私ですら危ない目に遭っていたのにその恋人だと、一条楽みたいにヤクザの息子ならば大丈夫だけど、一般人である彼を巻き込んだらタダでは済まない事は少し考えればわかる。

「……終わっちゃったな…私の初恋。」
生まれた出自を恨むつもりはない。
偶々、そうなってしまっただけなのだから。
諦めなければならなかった。辛いけれどもこれからは私以外のもっと良い人を見つけて欲しい。幸せになってほしい。
「…そんなの…本気で思えるわけないじゃん。」
好きで好きでその感情が溢れ出て、ここまで思える人はそう簡単にいるわけない。友達第一号で、友達作りに悩んだ時には助けてくれて、私の料理を手伝ってくれて、そしてそれが美味しいと言ってくれて。
私のことを2回も助けに来てくれる私の好きな人。
そう思ってしまって胸が苦しくて涙が出てしまっていた。
「……グスッ…グスッ…」
握り拳の上から溢れる涙。
「桐崎さん?……どうして泣いてんだ?」
「…!?こ…これはーー」
突然起きた大谷くんに私は驚いて涙を拭うが、彼は優しく私の頭に他を置いた。
「…大丈夫だよ、暗くても俺がいる。」

「!!……うん…ありがとう。」
諦められるわけがない。
諦めたくない。
私は心の底からそう誓った。

その後、大谷くんはしっかりと目を覚まして（先程のことは覚えてないらしい）状況を確認して慌てていた。
そのあと、持ってきていたトランシーバーで連絡を取ったが、思ってた以上に時間をかけていたらしく他のみんなも混乱して大慌てだったらしい。
戻ったら酒臭い先生達から大目玉をもらいそのまま肝試しは終わった。

２２話

林間学校も終わり夏が近づいてきた。
制服も夏服に変わり薄着となったシャツには汗が滴り色々と透ける夏の風物詩。
そんな中で今日この頃の昼時。林間学校のグループメンバーで屋上に集まり昼食を囲む。
メンバーの半数以上が女の子という側から見れば学校でのカーストは確立しているだろうこの状況。
鵜が取り出した1枚の手紙が話題となった。
「あの皆様、今日の朝に私の下駄箱にこの様な手紙が入っていたのですがこちらは何なのですか？」
鵜が取り出した手紙はシンプルに白い手紙にハートのテープを貼られていた。
それをみたメンバーは一目でラブレターだと気づいたが、それ以上にラブレターを知らない鵜に動揺した。

そうとは知らずに手紙を開けて読み始める始末で、流石に渡した相手に同情する。
どうやら送り主はサッカー部のイケメンで噂の彼だそうで集は露骨に嫌そうな顔をした。

「えっと、鶫さん。その手紙はねラブレターって言うの。」

満を辞して小野寺がラブレターについて言うが。

「ラブレター？一体どんな手紙なのですか？」

嘘でしょ手紙の内容とその名前で分からない事はないでしょ。
よし、ここは俺が教えてやるとしよう。

「鶫、ラブレターってのはな。伝説の桜の木の下で釘バットを持ちお前を待つと言う意味の果たし状だ。」

「は…果たし状ですと!?…こ…こうして入られません！急いで準備を！」

俺の言葉を完全に鵜呑みにして慌てて銃の手入れを始める鵜。
やばいめっちゃ面白い。

「どんな斬新な告白だよ。」

「嘘教えないの。」

集は腹を抱えて笑いながら、その対比に宮本はめちゃくちゃ睨む。

「え…えっとねラブレターって言うのはねーー」

小野寺から本当の意味を聞いてその話を理解したその瞬間から鵜は顔を赤くした。
まぁ、それが普通の反応だな。

「ここここ…恋文。」

「いや、何でそっち知っててラブレター知らないんだよ。」

目に見えて動揺する鵜にどうでもいい返をするが誰からも反応をもらう事なく話が進む。

「でも、鵜ちゃんは好きな人いるんだよね？」

突然、集がそんな事を言い出して慌てていた鵜が石のように固まった。

そして、その言葉に黙々と食べていた桐崎さんもビクッと反応した。

「そそそそ…そんな人はいいいい…居ませんが！」

いやもう、それはいるって言っているようなもんだろ。

「いやいや、隠さなくていいのに。」

「うう…一体どうすれば。」

鶫は終始悩んで昼休みを終えてしまった。
あっという間に放課後となり鶫が返事を返す時間となった。
部室に向かう最中にオロオロと廊下で同じ道を歩いては戻る鶫を発見した。

「なにやっとんじゃい。」

「!?お…大谷様!…これはそのーー」

「ああ…告白の返事か、チャチャっと行って答えてきなさい。」

おおよそ鶫がこんなにも動揺しているのは告白の件だとすぐに分かった。
彼女の生きてきた世界では考えられない話だからだ。
そして彼女が悩んでいるのもわかる。

「そ…そんな簡単なことではーー」

「簡単だよ、答える側は……イエスかノーの二択なんだから。……でも、告白した方はそれは物凄く勇気がいることなんだ。…だから、その彼に早く会いに行け。」

告白するには勇気がいる。

かつて何も言えないで終わってしまった恋を嫌でも思い出してしまう。

「……私の気持ちを…伝える事で彼が傷つくかもしれない…それでもですか?」

「当たり前だ。どっちを答えようが彼は前に進める。…でも、答えてもらえないと一生前に進めない。」

諦めても、前には進める。

俺はそうだったからな。

「…行ってきます。……後、ありがとうございます。」

顔つきが変わって鶫は階段を登る。

これも青春。